

層富

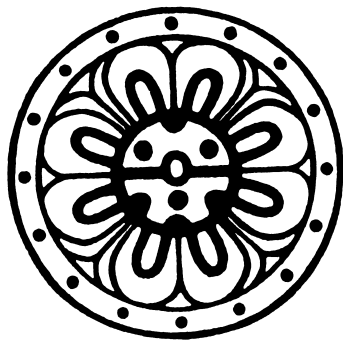
(川口勇書)

会誌名「層富」(そは・そふ)の由来

私たちが住んでいる平城ニュータウンの地域は、古代には「層富」または「層布」「添」とも記され、「倭六県」(やまとのりくのあがた)の一つでありました。出典は『日本書紀』の神武即位前紀己未年の春二月壬辰朔辛亥(20日)の条にみえる「層富県」によりました。

題字もはじめ小さく、あと大きくしましたのは皆様の将来と本会の末広の発展を願ったものです。

古代大和の由緒ある地名を理事会の賛同を得て会誌の名としました。ご愛顧の程を。(網干善教)



会章

平城ニュータウンの「平」と文化協会の「文」を上下に組み合わせ、単純な円形にまとめ、音如ヶ谷瓦窯跡から出土の古代軒丸瓦の中央部分に配置したものです。蓮華の中の埴輪の顔のようにも、二人三脚で楽しんでいるようにも見えます。

(基本デザイン 朱雀・寛裕)

富層

第24号 目次 2007年

卷頭言.....	上田 善次	2
持経者としての我が師 網干善教先生.....	平松 良雄	3
網干先生を偲んで.....		9
飛鳥寺東南禅院の位置について.....	柴田 晃良	24
短歌.....		30
俳句.....		36
グループからの便り.....		40
第二十四回文化祭記録.....		68
二〇〇六年総会記録.....		74
役員名簿.....		83
編集後記		



巻頭言

会員の皆様方へ

副会長 上田善次

今回の層富は、追悼・網干会長を偲んでの刊行となりました。巻頭言の執筆に当り、念のため十二回・二十三回の先生の巻頭言を、あらためて拝読させて頂き、胸のつまる思いを禁じ得ませんでした。

先生は文化協会発足当初より公私共お忙しい中、並々ならぬ努力と積極的な活動を続けてこられ、その足跡は二十三回に及ぶ「層富」の中にしっかりと刻み込まれているものと思います。偉大な有識者であり且又卓越した舵取りを失った文化協会は、地域社会にも世代交代の時期を迎へ、むつかしい岐路に立たされています。

会員の皆様方におかれましては、それぞれにお忙しい事とは存じますが、先生の折角の努力と、意志を反故にする事のない様、地域社会のため充実した文化協会の活動に御協力下さる様お願いします。

皆様のためまぬ努力と結束こそが、先生に対する最大の饒であると信じます。

持経者としての我が師 網干善教先生

平松良雄

平成十八年七月二十九日、関西大学名誉教授であらせられる網干善教先生が示寂された。享年八十歳であられた。

先生の御業績は今さら私が縷々述べなくとも、日本考古学の巨頭として、三角縁神獸鏡をはじめ今問題の高松塚古墳などの終末期古墳からさらにはインド国祇園精舎の発掘調査まで常に考古学会をリードしてこられ、その御業績は枚挙に暇なく、特に先生の追悼記事が特集されて盛んに喧伝された。また本稿でそれを述べることを意図するものでもない。ここでは、網干善教先生のある側面を紹介して、先生の学問の深さを披瀝してみたいと思う。

先生は大学教授としても数々の後進を育成され、その教え子達は現在も第一線で活躍されている。特に故

末永雅雄先生の主催された関西大学考古学研究室を継受され、綺羅星の如くの研究者を輩出されたのは先生の教育者としての面目躍如たるところであろう。

しかし先生が他の研究者と大いに異なるのは、「佛弟子」即ち佛教師としての一面を強く意識されていたことである。先生は明日香村内の浄土宗の寺院の僧侶の子息としてご誕生された。そして戒を受け、僧籍も持ちである。先生の中では研究者と佛教師の宗教者は併存するものとしてあつた様に見受けられる。科学と宗教の共存と言えようか。このような姿勢は現在の日本のように教育と宗教を分離させられてしまった戦後教育を受けた世代には違和感があるかもしれないが、人間や人生について深く考察する上において、宗教は欠かせないものと私も考え、その御姿勢に深く共感を持つものである。

さて私は網干善教先生と同様、佛家に生まれた。関西西大學で網干善教先生から学問の手解きを受けて考古学の道を歩み始めたが、縁有つて檀原考古学研究所に奉職した。そのお陰で先生とのご縁が深まり、親しくご指導を頂戴して今までの研究者としての人生を歩んできた。さらには、先生の居を構える平城ニュータウン内に引越して以来、何かとお目をかけていただいていた。私の立場から先生の評価などは烏澁がましい限りではあるが、本題に戻つて瓦経研究という一分野から見た先生の研究姿勢を綴つてみたい。

一一

先生は御生涯において強く佛教者としての意識を持たれた。それをして先生を瓦経研究に導いたものと私は拝察する。

先生の瓦経に対する研究姿勢は、一九七八年に「瓦経の復元におもう」（『日本歴史』三五六号）としてはやくも示されている。そこから先生のお立場を示した箇所を以下に引用してみると、

（前略）

瓦経の願主や、書写された人々のためにも、そして資料的価値の無価値に等しい瓦経片を、考古学、仏教史、延いては日本歴史の中に学術的資料としての生命を甦らせたい願いでもある。

先生は瓦経書写の目的は「法界平等利益」「成仏得道」にあると看破された。そこに仏教徒としての願望があることを見抜かれた。先生は同じ仏教徒として共感されたのである。そして一旦地下に埋蔵されて破壊され、死した経片を綴り直し、再生させる事を志した。

その行為はご自身の表現をお借りするなら、

「価値を失つた瓦経片に再び生命を与える」である。

その想いは三十年近く過ぎた二〇〇五年に執筆された瓦経についての解説（「瓦への写経」『葉師寺』一四四号）にも引き継がれている。ここに今となつては最後となつてしまった先生の瓦経復元に対する情熱が迸る一文を引用すると、

（前略）

このような作業によつて何百年もの前に、一生懸命
写経くださった瓦経に生命が再び甦るのです。そう
することが仏教で説く「作善業」だと私は思うので
す。そしてそれが写経の功德だと私は思うのです。

それは考古学者でもあり佛教徒でもある網干善教先
生ひとりが成し得る作善業でもあった。一九七六年に
瓦経の考察を発表されて以来その数は三十本に迫る勢
いで、先生の研究分野の中でも大きな位置を占めてい
るのは間違いない。また考古学研究者で、瓦経の專論
をここまで執筆された方もいない。瓦経研究の孤高の
位置を占めて、後学の追隨を許さないものがある。考
古学や文献史学の研究者を見渡しても、先生ほど直接
的に瓦経研究を正面に捉えられた方は少ない。僧籍に
身を置く研究者もいるが、瓦経研究を志している人物
は少ないと思われる。文末に先生の瓦経に関する論文
の一覧を付し、その御業績を顕彰したい。

瓦経は遺物であると同時に經典でもある。この瓦経
の研究とは經典の研究に他ならない。さらに研究を進
めるうえで正しく瓦経と同じ作業が必要となる。先

生の研究方針は徹底して瓦経の經典復原を志されたが、
この独自の方針は瓦経研究に大きな指針を与えた。ご
自身の随想でも述べられているが、經典の復原は実
地道な作業で、忍耐力を要求される割には成果が芳し
く挙げなかつた傾向が過去にあった。それを網干先生
は努力と研鑽で克己された。この事実は従来の願文分
析に終始していた研究の潮流に対して、紙本写経から
瓦経への変換過程、經典のテクストの追求や書写生の
個人的クセなど、瓦経の製作過程を明らかにする指針
を示す事となり、現在の瓦経研究の潮流を築く研究方
針を樹立された。

現在、佛教関連の史料は聖教（經典や注釈のこと）
と分類されて研究が進められているが、当然の事なが
ら紙本が中心で金石文は極少量である。聖教研究が主
として文献史学の立場から行われることも至極当然の
事である。古代では正倉院の写経機構や、中世では各
地に残された一切経研究が主力文野と言えよう。この
ような学界の潮流に対して瓦経は文献史学からの研究
は皆無に等しく独り考古学からの研究があるに過ぎな
い。瓦経とて聖教の一部であるし、発願から埋納まで

のプロセスを考慮すると莫大な労力を結集しており紙本に比肩しうる貴重な史料と言えよう。

二二

先生は『明日香村史』の編纂中、その完成を目前にして帰真された。一方でご自身の著作集も精力的に刊行されていたが、『壁画古墳の研究』が、真に絶筆となつてしまわれた。その執筆はまさに生命を削つての作業で、校正をお手伝いした我々はあまりの壮絶さに言葉を失っていた。その最終巻に「瓦経の研究」を予定されていた。

思い返せば二〇〇〇年夏、先生から『明日香村史』の編集に参加するようにご指示があり、併せて瓦経の拓影コピーと復原作業についてご指示を頂戴した。この瓦経の拓影とは現在東京国立博物館に蔵される、播磨国極楽寺出土の瓦経の拓影のことである。寛政十一年（一七九九）に発見されたが、明治維新の混乱で実物が散逸してしまい、この拓本のみが唯一残されたのである。瓦経は約五百枚に達するので、誰もこれを翻刻しようとはしなかった。この翻刻を網干先生は志し

たのである。実は昭和五十四年に文部科学省の科学研究費、一般研究C「瓦経の復原研究」を得て調査を計画されていた。しかし、先生もなかなか実現できず私に託されたが、その後村史編集に苦渋し作業を中断させてしまった。私の不徳の致す処で先生においては完成を眼にすることなく示寂された。弟子の末席を汚す身としては、またもや先生のご期待に添うことができず、慚愧の念に堪えない。

この紙面をお借りして先生への哀悼の意を表すると共に、文末ながら先生の瓦経論文のリストを掲げて、先生からの宿題を果たさんことを誓い筆を擱きたい。

四

網干善教先生瓦経論文リスト

一九七六「関西大学考古学資料」瓦経」片の復原 秘密三経について」『柴田実先生忌辰記念日本文化史論叢』

一九七七「國學院大学蔵「瓦経」片の復原研究」『國學院雑誌』七八—九

一九七八a「瓦経片の復原におもう」『日本歴史』三五六号 日本歴史学会

一九七八b 「関西大学考古学資料「瓦経」の復原（その二）」『史泉』五二 関西大学

一九七九a 「伯耆大日寺出土の瓦経について」『関西大学 文學論集』二八一—三

一九七九b 「関西大学考古学資料瓦経片の復原 補記」

『史泉』五三 関西大学

一九七九c 「「瓦経」資料解説」『檀原考古学研究所紀要 考古学論攷』三 奈良県立檀原考古学研究所

一九七九d 「國學院大學蔵「瓦経」の復元研究 補記」

『國學院雜誌』八四—八 國學院大學

一九七九e 「瓦経の復原とその考察」『鷹陵史学』六号

佛敎大学史学研究室

一九七九f 「奈良国立博物館蔵を主とする瓦経の復原」

『南都佛敎』四二号 東大寺

一九八〇a 「瓦経片の復原試考」『史泉』五四 関西大学

一九八〇b 「宝海天神社蔵の瓦経復原考」『仏敎の歴史と文化』同朋社

一九八一 「東大寺伊良湖瓦窯出土の瓦経の復原」『南都佛敎』四七号 東大寺

一九八二a 「瓦経片の復原研究—江口治郎氏寄贈の関

西大学考古学資料について—」『阡陵 二十周年記念論集』関西大学附属博物館

一九八二b 「京都今熊野亀塚出土の瓦経について」『日本宗敎社会史論叢』水野恭一郎先生頌寿記念会

一九八二c 「伊勢小町塚出土の瓦経について（一）」

『小野勝年博士頌寿記念 東方學論集』同刊行会

一九八三 「平安後期瓦経片の復原研究—鳥取県立博物館蔵の大日寺出土瓦経を中心に—」『南都佛敎』五〇号

一九八四 「徳島県大伏旧釈迦堂出土瓦経の復原研究（二）—「仏説觀普賢菩薩行法経」について—」『関西大学考古学等資料室紀要』第一号 関西大学考古学等資料室

一九八六 「大阪長尾コレクションの瓦経について—「治承二年」在銘瓦経を中心に—」『関西大学文学部論集 創立百周年記念号』

一九八七 「黒川古文化研究所蔵瓦経片の復原—伯耆大日寺出土の瓦経について—」『横田健一先生古希記念文史論叢（上）』同記念会

一九八八 「瓦経の復原的研究—近時所見の瓦経片資料について—」『斎藤忠先生頌寿記念 考古学叢考』

一九九六 「徳島県大伏蔵佐谷出土の瓦経片の復原と考

(裏面)

(表面)



播磨極楽寺出土 瓦経「金光明経卷三 二丁」

察」(二)『妙法蓮華経』「第二」について」『関西大学博物館紀要』二 関西大学博物館

一九九七 a 「阿波板野犬伏出土の瓦経片の復原と考察」

『藤井克己氏追悼論文集』同論集刊行会

一九九七 b 「徳島県大伏蔵佐谷出土の瓦経片の復原と

考察(続)——『妙法蓮華経』「第五、六」について——

『関西大学博物館紀要』三 関西大学博物館

一九九七 c 「阿州犬伏蔵佐谷出土の瓦経片の復原と考

察」『妙法蓮華経卷第二』について——『佛教思想文化

史論叢』渡邊隆生教授還暦記念

一九九八 「阿波国板野町犬伏出土瓦経片の復原——『妙

法蓮華経』卷第七について——『日本仏教文化論叢』北

畠典生博士古希記念論文集

一九九九 「播磨極楽寺(常福寺) 出土瓦経について」

『播磨極楽寺瓦経——特別史跡姫路城跡内堀出土——』姫路

市教育委員会

二〇〇五 「瓦への写経(瓦経)」『薬師寺』一四四号

漢字等の標記についてはそのまま、統一していない。

以上については遺漏あるかもしれないが、あれば筆者の勉強不足としてご寛恕を乞う次第です。

(奈良県立橿原考古学研究所 平松 良雄)

網干先生をしのぶ

石井光子

稲淵の川の小魚しずまりて発掘かたる師の声優し

この蒼き遊星を発ち黄泉路よみちゆく師は無念なりき高松塚はや

千余年太古のままの飛鳥川師に導かれ友らと歩む

網干善教先生を偲んで

上田善次

私が始めて網干先生にお目にかかったのは、確か昭和四十七年秋頃だったかと記憶して居ります。当時関大のPTA役員会の歴史を尋ねて中国地方の一泊バスツアーがあり、車中先生の考古学の一端を拝聴する事が出来ました。それまで考古学に関する話を聞くチャンスのなかった私にとって、新しい世界への興味をか

きたてるのに充分の魅力あるお話でした。

あれから約二十五年目、縁あって大阪より平城ニュータウンに住居を移す事になり、平成十年春文化協会に入会させていただき網干先生に再会する事になりました。それから八年間第二火曜日の歴史教養講座が待ちどおしく先生のお話を聞ける楽しみを持つ事が出来る様になり、ささやかながら老後の生き甲斐を感じて居りました。先生の持論「想像でものを言っってはならない」とおっしゃられる信条に敬意を持って学習させて頂きました。好々爺然とした先生の面影と持論がなぜかだぶって私の脳裏をよこぎる事があります。心よく頼み事に応じて下さるあの時の笑顔は二度ともどつてくる事はありません。歴史的な快挙である高松塚古墳の発掘あれから三十数余年、日本の心の故里飛鳥周辺の地下に眠る文化財に対する国民の関心は飛躍的に昂まりました。多岐にわたる活躍とひとかたならぬ先生の努力があったからこそその結果であり、結晶であったと存じます。平成十七年秋頃からは歴史教養講座のお話しも日本書紀の解説は少なくなり、高松塚古墳の壁画損傷に対する文化庁への義憤に近い話題が多くな

ってきました。

先生が病を得て入院されたのは、それから約二ヶ月後位の春先の頃だったと思います。解体が議論され始め新聞の社会面で是非が伯仲するなか先生は黄泉のくにへと旅立たれました。高松塚の発掘に始まり石室解体で終焉を迎えられた三十数年の半生を想ふときまさに忸怩たるものがあります。今更ながら文化庁の対策のまずさにあきれるばかりです。我々考古学ファンにとつても、余りにも無念やるかたなき結果となつてしまいました。生前の余りにも多忙を極めた生活、せめて浄土にあつては晴耕雨読末永考古学の若き継承者たちの活躍を見守られ、悠々自適の生活を送られる様お祈り致します。

網干善教先生を偲んで

梶野 哲

次の文は「コミュニティ高の原」という山下新聞鋪の協賛で出版された文化協会報の先生の巻頭のお詞です。

「第一回文化祭の開催にあたって」

私たちが日常よく使います言葉に「切磋琢磨」という熟語があります。出展は中国の「詩経」のなかに「切のごとく、磋のごとく、琢のごとく、磨のごとし」とあることから生まれた熟語ですが、その意味するところは、仲間どうしがお互いに励まし合つてそれぞれ人間性を高めることであります。

私たちの居住しています平城ニュータウンは十数年前までは見渡す限りの雑木林でした。そこが開発されつつあり立派な町が形成されつつあり、縁あつて、お互いに移り住み、近隣の誼みを結ぶようになりました。

しかしながら同じ町内に居住していても、お互いの疎通がない場合が多く、ともすれば閉塞的な生活になりがちです。それでもよいと考えられる方もおられるかもしれませんが、人間生活は没社会的であつてはいけないと思います。互いに自分のもつ「よいもの」を出し合い、また人から「欠けているもの」を教わつて、自分自身を人間的に高めていくことが大切だと考えま

す。

それが「切磋琢磨」であり、そうした活動の母体となるように、わが町に「平城ニュータウン文化協会」が発足いたしました。爾来、わずか半年ほどしか経ちませんが、多くの講座や同好会を開設し、セミナーや大和路見学会なども実施してきました。

こうした経過にふまえて、文化の日を中心に、ささやかながらも「文化祭」を開催しようということを描いたしました。本会の会員はもちろんのこと、平城ニュータウンに居住される方々の理解と協力を得て、この催しを有意義なものにしたいと思います。計画いたしました諸行事に積極的に参加下さいませようお願いします。なお自治連合会並びに市教育委員会にお礼申し上げます。

第一回平城ニュータウン文化祭は、五十八年十一月三日から六日まで平城第二団地集会所大会議室と和室・右京小学校講堂・平城西公民館和室・北部出張所会議室・銀行ロビーをお借りして、大々的に開催されました。

網干先生と初めてお会いしたのは、松岡禮一先生のご推薦を得て、前公団奈良市営業所長で当時右京四・五丁目自治会長永田喜一郎様と、当時、大学教授であつた大橋一二先生とご一緒して、「平城ニュータウン文化協会の設立の為に、会長になつていただきたい」とお願いに上がった時です。先生はご快諾下さいました。

先生は、中学時代に考古学を学ばれ、義務教育や高校教育も携われて、大学教授になられ、考古学会のみでなく、博物館学会や橿原文化協会長を歴任された方で最適任な先生でありましたので、本当に感激いたしました。

そして、五十八年二月二十七日に文化協会設立総会が開催されたのです。五十七年八月に自治連合会役員会で提起されてから半年、平城ニュータウン（右京地区）入居開始は四十七年十一月ですから、十年も必要でした。

設立後、諸行事が開催され、五十八年度・セミナー

は
(1)四月二十四日「シルクロードの自然と文化」網干善

教先生

(2)六月二十五日「私と楽器」当地の楽器博物館大西尚
明館長

(3)右と同日「民話と私たち」阪本 学先生

(4)九月十日「北モンゴルを語る」永田喜一郎本会事務
局長

(5)十月一日「高校生は親に何を望んでいるか」橋本孔
延校長

(6)十一月二十六日「こどもの読書を育てる環境づくり」
大橋先生

(7)三月七日「家庭と健康管理」奈良女子大学山本公弘
先生

(8)三月二十日「家庭園芸あれこれ」船田忠康先生

大和路見学会が二回。講座・同好会数二十七。会員
数四百三十人。収入五六六、五三八円 支出四三七、
五四四円 で順調でした。

それで、寛 裕先生から戴いた基本でザインを基に、
私が図案化した会章、会長が発案され、川口 勇先生
が揮毫された「層富」の名称の会誌第1号を、大橋先
生が編集長を担当され発刊されたのが五十九年八月で

した。

そもそも、文化協会が設立された遠因は、古代から
一度も人が住まなかった土地改造設計担当者が、私の
父の知人であったので関心をもったのですが、当時の
日本住宅公団関西支社長が「ニュータウンに何が必要
なのか、住んで考えよう」と当地に転居された熱意に
感動された永田喜一郎様、住民の希望実現に努力下さ
った市会議員田中幸夫先生、大津克巳住宅都市整備公
団平城開発事務所長や柳内七郎課長、孝田有禅平城西
中学校長、右京小学校校長畠山典久先生、稲田武一スポ
ーツ協会長、下条新太郎先生や野村信治様や太田豊臣
様のお話が契機でした。

「層富第三号の刊行に寄せて」 先生のお詞

テレビのコマーシャルを振っていえば「買い物籠を
提げて文化協会へ行こうとでもいいでしょうか、気軽
な気持ちで講座、同好会などに参加し、地域の人たち
と交流し、少しでも日常生活に役立つような会であり
たいと念願しています。だけど最近、住民の方の極く

一部の人であろうと思いますが、「文化協会は少数の趣味の集まりだ」とか、「自治会とは何ら関係がない」などというような批判を耳にすることがありますが、そうではなく、むしろ会の創立の経緯からみて、自治活動の一翼を担って発足したものでありますし、活動内容も、いろいろなことに関心を寄せ、趣味を大切に育て、生活をより豊かにしている人の方が「無趣味」の人間よりはるか充実した人生を送ることができると思っています。社会の現役で忙しく働いている時は、そうしたことの必要性をあまり感じないでしょうが、人間は常にそうであるとは限りません。

社会には種々の会が組織され運営されています。なかには会員資格に何名かの推薦をうけ、審査し適当と認められた人しか入会できない会もあります。そういう会は往々に選ばれた人という特権階級意識が、底流にあります。私たちの文化協会はそうではなく、住民あるいはここに勤務されている方であれば、誰でもいつからでも自由に参加でき、活動し、勉強できる会なのです。

会を運営して下さっている方々、講座や同好会の世

話をすすめて下さる方々、みんな何とかして私たちの地域をよくしよう、その中で自分の人生をより有意義にしようと思い、奉仕的に活動して下さっているのです。またある会のように欠席者にペナルティーを課すこともありません。家の都合によって参加できないことも多々あると思います。参加できる時、一回でも多く来て下さればそれでよいのです。それは会のためではなく自分自身の問題なのです。しかし、文化協会のような目的と組織をもつ会は、せっかく作っても参加下さる方が少なくてはその目的を達成することができないのです。

本会も創立以来第四年目に入りました。この機会に会員の皆様にお願ひしたいことは、知人、友人、近所の方等に会の主旨と活動内容を紹介し、呼びかけて下さって気安く気軽に仲間に入って活動の輪に連なっていたきたいということです。私たちも現役であり仕事の上でも社会的にも忙しい日々を送っています。それにつけて、会の運営に十分果たすことができず、会員の方々の不満もあるかも知れません。しかし、暇つぶしにやっているのではあまり意義はなく、むしろ忙

しい人が何とかして時間を割いて頑張っているということに文化協会の活力があると考えます。これを機会に今後もしご支援の程をお願いします。

網干先生は、いつも私達の心に響く素晴らしいお話をして下さいました。また、格調高い文章でご啓発ご指導賜りました。このように本当に偉大な会長でありましたのに、読者が恐縮してしまう程謙虚なお言葉を使われました。とても並の人間にできることではありません。

もつとたくさん再録して皆様に読んでいただきたい思いで一杯ですが、これ位でも一杯で、紙面に限りがありますので、追加することが出来ません。せめて、ここに掲載させていただきました二つの文章をお読みになって平城ニュータウン文化協会設立の原点と、意義に思いを馳せ、先生が示し下さった根本精神を噛み締めていただきたいと願ひ、先生を偲ぶ言葉といたします。

網干善教先生に捧げる漢詩二首

片桐 一夫

網干善教先生七秩古稀

考古高蹤朱雀丘

考古の高蹤 朱雀の丘

學風颯爽教倫儔

學風颯爽と 倫儔に教ふ

師方七秩不堪慶

師方七秩 慶びに堪えず

賀宴恭陪丁丑秋

賀宴恭しく陪す 丁丑の秋

網干善教先生揮毫太宰沫雪歌

筆蹤的歴跳歌碑

筆蹤的歴として 歌碑に跳り

卿相望郷宛轉支

卿相の望郷 宛転として支ふ

太宰雪花鎮白石

太宰の雪花 白石に鎮まり

篠川橋畔萬祥移

篠川しやうせんの橋畔きやうはん 萬祥ばんしやう 移うつる

右の2首の漢詩が網干先生の立派なことを表わしてゐるのであります。

網干先生をしのんで

川 端 和加子

昨年七月末に網干先生がご逝去され、はや六ヶ月が過ぎようとしています。

文化協会は、一九八三年（昭和58年）当時の平城ニュータウン自治連合会の要請もあり地域住民の文化向上の為、先生は「層富」「巻頭言」の言葉でも平城ニュータウンに「文化の燈火を」という願いをこめて、文化協会が発足したようです。地域に文化を高め、住む人達にとって素晴らしいコミュニティの場でありたいという思いで、永い年月「会長」をされ、御多忙な日々を会のために、歴史教養講座では、考古学の堅苦しい講義を素人の私達にもわかりやすく説いて下さり、内容のひとつに時事の話題となる、何気なく使ってい

る言葉の歴史的な意義など、知っていれば得をするような事をいろいろ教えて頂きました。又、観月の夕べでは、神功の池に映る月をめながら、会員同志交流し、先生の即興の短歌を詠まれるのも楽しみのひとつでした。初期の頃、大和路見学会で、今まで知らなかつた古墳めぐりや、飛鳥路、葛城古道などなど、参加して、新しい方々にも巡りあえ、今に至っております。又、平成十三年三月には、「奈良市に萬葉歌碑を建てる会」の27番目大伴旅人の「沫雪のほどろほどろ……」

の歌碑が、西の京唐招提寺の東の丘、此処五条町に、先生の御揮毫で除幕式が挙行されました。先生が刻まれた歌碑のあまりにも美しい字に感激いたしました。網干先生の自作の歌も層富に何首か記載されていきました。そのなかの一首、「萬葉の心を誘う秋篠の 川のほとりにわが碑建ちけり」

私事ですが、今年一月二日に薬師寺に初詣をし、小雨の中、先生の歌碑を訪ねてみました。

最後に先生の御冥福をお祈り申し上げます。

網干先生追悼の歌

木庭 和子

むしばまるる飛鳥美人に胸いたため念ひ残して逝きませ
る師よ

遥かなる祇園精舎の朝夕を師は誦し給ふ無量寿阿弥陀
経

師を囲み夫と歩きし精舎跡インドの夜の星あかり道

年措かず母と夫とを失ひて今宵又聞く師の君の訃

何故?何故?と虚空に問へどい応へなく深き悲しみ充ち
くるのみ

千万遍呼べば届くや師の君の訃を肯んぜず御名呼びつ
づく

はろばろとインダス平原馳せゆきて師の温顔に逢ひし
彼の日や

耳朶に受けし熱き息吹のよみがへる身悶へしつつ人を
恋ひ居る

インドよりスベルの誤り正しくる教師の君との交信
楽しかりし

この道を行けば逢へるや師の君に希ひ空しと知りつつ
行く常福寺橋

網干先生の笑顔

玉置 小代

バス停に亡き師をさがす日のありて

黒き帽子の笑顔忘れず

昨年の一月初九日、いつものバスへ網干先生が「第
一住宅前」から乗って来られました。変わらぬ優しい

笑顔でしたが、とてもお疲れの様子でした。「足が痛いんや」とおっしゃり、近々検査に行く予定だどのお話を伺い、気にかかりながらお別れしたのが最後になってしまいました。

春には随分良くなられたとお聞きしていましたのに、七月二十九日急逝され、哀しみと悔しさでいっぱいになりました。先生は高松塚古墳壁画の第一発見者でもあり考古学者として偉大な実績を残され、さらに沢山の後進の方々を育てられ、皆さまに惜しまれて世を去られました。

その網干先生を私たち文化協会へ会長にお迎えしてもう二十四年が経っています。大きな柱を失ってしまいました。行く先に不安を感じます。

でも、私たちは先生の遺志を忘れず活動を続けるほかに、ご恩に報いる方法はないと思いますので、先生を偲びつつ、総会で話されたお言葉を要約して記します。

○文化協会は自分の趣味を通じて学び向上する会でありたい。積極的にそれぞれの仲間に入っていくよう心がけて欲しい。

○自分たちで無理はせず、できる範囲でやって楽しい活動の場にして下さい。

○老年人口の増加が顕著の中、われわれの世代が生き生きと有意義に過ごす事が大事で、その為にも文化協会は活発に運営を続けたい。

○「層富」は少ない予算の中でも発行を続けよう。

先生の文化協会への愛情を汲みとって、改革しつつ、歩んで行ければと願っています。会場の問題や、とりまく環境の変化にもお気遣いをいただいていましたが、どうぞこれから見守っていて下さいませ。

「短歌を楽しむ会」にもご多忙の中、時おりお顔を覚えて下さってご指導いただきました。嬉しい日でした。「飛鳥高松塚壁画発掘三十年」の記念の短歌五首と「インド紀行雑詠日誌」と題した短歌はいずれも健筆で墨書されていて、私の大切な宝ものとなりました。

お骨の一部はご家族の手でインドのガンジス川に散骨なさったと伺いましたが、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

時には、網干先生の最後の著書となった「大和の古代寺院跡を巡る」を携えて、いくつかのコースを歩き

ながら、ご遺徳を偲びたいと思っています。

網干先生ありがとうございます。

合掌

感謝をしています

松岡禮一

網干先生の偉大なる事は、今、敢えて言う必要はない、と思うのですが、私を感じています事は、

網干先生は、なんでもできる先生

と、いう事です。

いつも、感服しておりました。

短歌については、かなり以前から作歌されているように拝見しておりました。毎年行われる「観月會」の席上、拝聴する即興の短歌にも、敬服しておりました。しかし、「俳句はお作りにならないだろうナ」と思っておりましたところ、いつでしたか、素晴らしい「句」を我々に示された時は、びっくりしました。脱帽の思いをしました。ウウンと唸る「俳句」でした。本当に、驚きました。

先生は、なんでも出来る先生でした。

先生は、偉大なる先生でした。

このような先生に、「色々、教えていただいたのだ」と、思うと、心から、感謝の念がわいてまいります。

長い間、本当に、有難うございました。

心から、ご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

網干先生と観月会の思い出

松村 せつ子

私が文化協会に入会しましたのは、「短歌を楽しむ会」へのお誘いを受けたのがきっかけです。短歌の会に入会した時は、まだ篤先生が御健在で指導いただいていたのですが、滋賀へ転居され、暫く先生不在でした。そんな時網干先生が講師をして下さる事になり喜んでいたので、何しろ忙しい先生のこと、一年に一度？位しか出ていただけませんでした。でも先生とは毎年秋の観月会にも参加させていただく様になり身近にお会いして話しをさせていただきました。先生はい

つも穏やかで、にこにここと優しい口調で誰にでも接して下さり、月にまつわる講義をして下さったり、即興で歌を詠んで下さったりして楽しい月見の会でした。その楽しみも無くなり本当に寂しい限りです。

昨年十二月九日奈良新聞社主催の歴史街道フォーラムで高松塚古墳発掘が語るもの―網干善教先生を偲んで―という講演があり、玉置さんと参加しました。講師は先生が高松塚壁画を発見された時一緒にお手伝いをされていた、森岡秀人氏で現在は芦屋市教育委員会文化財担当主査をされている方です。34年前関大二回生だったそうで、今は「森岡日誌」として知られる記録に当日の感動と印象を大学ノート八頁にメモされていたとの事です。春休みもアルバイトも返上して自費で発掘に従事された10名の学生達への思いやりが痛いほどわかったそうです。先生の優しい人柄が伝ってくるお話し等も聞きました。講演が終了して、気がついたら、先生の奥様と息子さんも聴講されており、玉置さんと挨拶に行きましたら、奥様も今日聞いた話は始めて知った事ばかりだと感激しておられました。家では高松塚の「た」の字も話されなかったとか、息子さ

んもとても厳しい父でしたと言われ、皆に優しくかった先生の別の一面を伺い知る事が出来ました。その時息子さんから昨年十一月に遺灰を明日香村と先生が発掘に携わって来られた、インドの祇園精舎跡近くのガンジス川にも流されて来られた事やお墓も近々飛鳥から西大寺へ移され新しく建立されるとお聞きしました。今でもひょっこりと先生が現れて「どうや、元気で頑張っているか」と声をかけて下さる様な気がします。今頃は恩師の末永先生や壁画に描かれていた飛鳥美人達と談笑されているのでしょうね。網干先生のような立派な先生とお会いできた事、とても嬉しく誇りに思っています。いい思い出を本当に有難うございました。

合掌

網干先生追悼

森 田 陽 子

飛鳥川 流れに桜散れる時教へを説きし師の君在りし
天皇家の御供花薫れる葬斎場偉業追慕の人々集ふ

彼岸にて高松塚を見給ふや師の葬送の夏日の寂けさ

雲の峰 目に痛いたし飛鳥路に世界を駆けし偉業を偲
ぶ

星になつて

安 田 和 子

網干先生、あつけなく天国へいってしまわれて、こんなに先生がいらつしやらないということが寂しい事とは思いませんでした。月に二度の朝日カルチャーセンターでの歴史講座に七年ばかり通いました。めつたにお休みになることもなく、いつも意氣軒昂で明るく

よく透るお声で、時には笑わせて下さりながらの御講義でした。私自身も休まないで「行かなくっちゃ、行かなくっちゃ」と思っていたのでしよう。随分とそういう思いが私の心の何パーセントかを占めていたことを今、実感させられているのです。おかげで、そのパーセンテージ分の重さの「高松塚古墳」への関心が、懐古、知識となつてしつかりと私の心底に埋まっているのです。

昨年の十月三日の朝日新聞に掲載されました高松塚古墳の裸の写真は、何時の間にか私にペンを走らせていました。その投稿文をその月の十三日の朝刊に目にした時、なんとも云えないすがすがしい涙が流れました。先生の高松塚古墳を愛される氣持ちを新聞社の編集者が受け止めて下さったのでしよう。私には初めての投稿でした。

「高松塚古墳の研究」という書物は、先生の優れた書物の中でも突出した秀作、力作であり後世に遺る記念すべき一書です。その中で小粒の寶石のように「ぼろっ」と書き落とされた一行の文章が私を突き動かせる力となつて投稿文を書かせたのでした。

文化協会の「短歌を楽しむ会」でのわづか数回のご教授も懐かしい思い出となっております。ありがとうございました。

「平城宮跡の短歌コンクール」には美しい短歌をご協賛下さって有難う御座居ました。その折頂戴いたしました先生自筆の色紙は、「家の宝として大事にしているよ」と皆様仰って下さいます。

その会に数首頂戴いたしましたお歌の内の二首です。

・碧空いらかに薨波打つ大殿の建つ日待ちちわぶ壺楽の都は

・諸々の行は無常とほとけ説く祇園精舎の跡をほりつつ

我侘な私を笑って御赦しく下さって贈って下さった秀歌です。

これからは「高松塚古墳」のこと忘れることなく見守ってまいります。

インド舎衛城の群青の夜空に浮かんだ満月。

石舞台の月見の会場で倉梯山から金の粉を吹くように御光を放って昇ってきた満月。

御一緒に見ましたね。

講演なさる先生のお声忘れません。

「短歌を楽しむ会」の同志をお見守り下さいね。

満月の夜には星になって私たちのこと見ていて下さいね。

つづけて投稿文を記載させていただきます。拙文ですがお読み頂ければ幸いです。

高松塚古墳石室解体に関して

十月三日の朝刊に掲載された奈良県明日香村の高松塚古墳の解体中の写真を見て、修復・保存のためとは云え、やはり悲しい思いは消せなかつた。これは古墳の裸体である。痛々しく思えた。ここ迄やるのだから、後世に悔いの残らないようにと、祈りたくもなつた。

従来、石室内の壁面に描かれた人物像、四神図、日月像、そして天井に描かれた星座などが関心の的であつた。が、この日の写真を見た時、古墳の築造に係わつた無名の技術者や造営に携わつた人々の姿が浮かんでみえた。

美術、思想、技術面の詳細、副葬品の時代性などの歴史的探求もさることながら、何故この土を運び、この土をどこから、どの様にしてどの様の人が運搬した

のだろう。

版築工法という大変技術的に高度な工法を使っている。ということは聞いたことがある。大和の土なのか難波の土なのか、この工人達の本拠は何処なのか。どういう氏族の下で働いたひとなのか。工人達の情報をすることは、この裸の墳丘から計り知る事は可能なのではないだろうか。研究者の方々に御願いたい。ふとそんな事への思いが巡ったのだった。

追悼歌

悲しみの淵に沈めん思ひ出は玉響たまゆら美しき水精みずしょうとなれ

海底うなぞこの青の夜なり天然てんぜんの満月つつき見るわれは魚の目して

明日香路に曼珠沙華ほど朱くなき松葉牡丹の夏の思ひ出

網干善教先生に感謝

山内梅乃

昭和五十七年文化協会設立發起人の一人として、加えていただき、翌年五十八年二月平城ニュータウン文化協会が設立されました。総会記念講演は、網干先生で「わが町と周辺の歴史と文学」と題してご講演を拝聴させていただきました。それまで、私は考古学にはあまり関心がなく好奇心からの（失礼）聴講でした。お話を聞きし周辺の遺跡、とくに「カラト古墳」のことなど、わかりやすく、魅力あるお話に感動いたしました。講演終了後第一回目の役員会が開かれ、先生と間近にお話をする機会を得ました。それから今日まで理事として、聴講生の一人として、教えを請うことになりました。

理事会では、勝手気儘な我々の意見も黙ってお聞きになります。論すような先生の物言いには、重みがあり皆納得したものでした。又「大和路見学会」は先生の発案でした。当時は他府県から、この地域に居住さ

れる方が多くあり、会員だけでなく、地域の方にも、もつと奈良を知って貰おうと開かれました。実施される前の週にはレクチャーも開かれ、現地のことを、よりわかり易く、知ることができました。あまりの参加人数に迷子続出のため「目印」ということで旗を作り持つようになりました。現在は「…歩く会」が使用しています。

あんなこと、こんなこと。日がたつにつれ、感謝の気持ちが増幅されて来ます。

再入院される前の晩お電話を頂き、「すべて了承した、皆で相談して進めて行くように」と、いつもと変わらず元気なお声が最後となりました。病魔と闘いながら資料には、眼を通して頂いていたと思うと胸が締め付けられる思いです。このうえは、先生の偉大な業績である、「地域文化の活性化」の意志に報いるため、少しでもお手伝い出来ればと思っております。

どうぞこれからも文化協会を見守ってくださいませ。
心からご冥福をお祈り申し上げます。

先生がよく話されていた言葉を忍んで

- 買い物籠を下げて文化協会に行こう
- 試験・卒業の無い文化協会で勉強しよう
- ゆっくり、のんびり牛歩のごとく
- 何事も知らないよりも知って得する楽しい生活
- 習ったことは犬に話せ

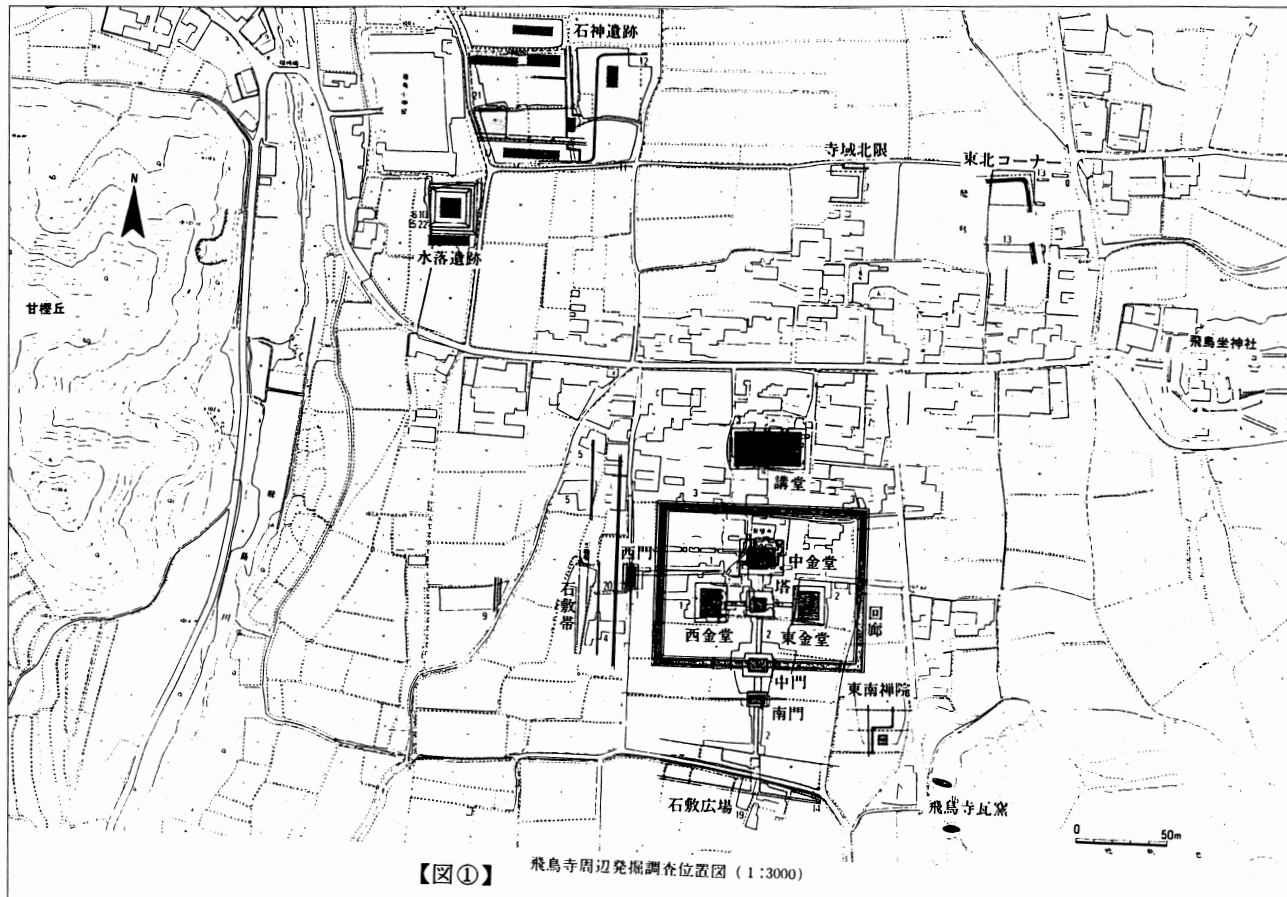
合掌

飛鳥寺東南禪院の位置について

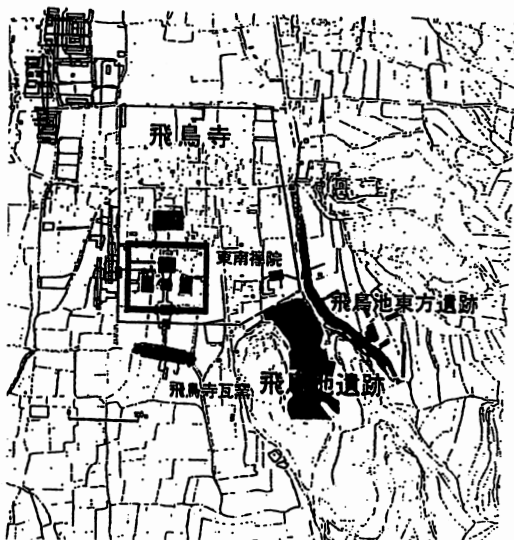
柴田晃良

網干先生は、関西大学飛鳥史学文学講座「飛鳥と周辺の考古学的調査」（平成十三年四月八日）のレジュメで飛鳥池遺跡から出土した富本銭について疑問点や課題を詳述された後『こうした貨幣そのものの課題とは別に年代決定の重要な条件となる出土層位や伴出物の問題がある。そのなかで重要な要素となっているのは僧道昭が唐から帰国し、文武天皇四年（七〇〇）の遷化まで住した飛鳥寺東南院との関係である。（中略）とところが、富本銭に関連した諸本の東南院の位置図が全く違ったところに移されている。この位置は誰が見ても飛鳥寺主要伽藍の「東方」であって「東南」ではない。「東院」の位置である。いつの間にか東南院の位置が変わっている。そしてその東南院の出土の瓦が、富本銭の年代決定の主要条件になっていることをどう解釈してよいのか、不可解である。』と述べておられます。

私は、飛鳥池遺跡の発掘調査現地説明会には参加していませんでしたので、これを聞いて奇異な思いをいたしました。というのは、私が知っている道昭が創建した飛鳥寺東南禪院の位置（推定地）は、飛鳥資料館図録第十五冊『飛鳥寺』（昭和六一年三月十八日）にある、飛鳥寺周辺発掘調査位置図（図1）のように飛鳥寺南門の東南です。その位置がいったいどこへ変わったのかと疑問に思っていたところ、帝塚山大学市民大学講座「飛鳥の宮廷工房と富本銭」（平成十三年四月二八日）のレジュメ掲載の飛鳥池遺跡の位置（図2）で網干先生のいわれたように、飛鳥寺主要伽藍の東に変わっていることを知りました。そして後日、その位置が変わったのは、花谷 浩先生の「飛鳥寺東南禪院とその創建瓦」（『瓦衣千年』平成十一年十一月二七日）に拠っていることを知りました。



飛鳥池遺跡の位置 【図②】



私の甚だ簡略な抜粋で正鵠を得ていないかと思いますが、それには、この新しく標示されているところで

①平成四年の発掘調査で、礎石建ち基壇建物一棟が見つかった。この建物の礎石据付掘方から出土した土器や周辺から出土した瓦からみて、七世紀後半代に造営されたと考えられた。

②その前年に、飛鳥池遺跡の最初の調査が行われ、出土した瓦にそれまで飛鳥では存在が知られていなかった瓦が多数みつかる。これらは飛鳥寺の中心伽藍からほとんど出土しない瓦だったため、そのその使用場所が問題だった。このことは、この一郭が中心伽藍とは性格の違う一院との見方を強くする。ここも飛鳥寺の寺域東南部に位置する。

③平成五年に、奈良市教育委員会が行った平城京右京三条一坊十四坪西辺（図3Ⅱニヶ辻付近）で、平城京で出土したことのない、飛鳥寺平成四年調査で出土したものと同範の軒丸瓦、と軒平瓦が出土した。

④前項の調査地では古代寺院の所在は確認できない。しかし、三条大路を隔てた南は右京四条一坊（図③）。平城遷都にともない東南禅院が元興寺（飛鳥寺）と

離れて移転した禅院寺の地だ。

⑤平成四年の調査地が東南禅院の一郭と仮定すれば、その移転先近辺からその創建瓦が出土することは腑に落ちる。

⑥平成一〇年飛鳥池遺跡の調査で瓦窯（飛鳥池瓦窯）がみつかり、前記の創建瓦がここで生産されていたことがわかった。

⑦この平城京での発見によって平城京右京の禅院寺所在地を特定するまでには至らないものの、飛鳥寺平成四年調査区が道昭創建の東南禅院の一部にあたる蓋然性がきわめてたかくなった。と同時に、ここや飛鳥池遺跡から出土し、飛鳥寺中心伽藍からはめつたに出土しない一群の瓦が、その所要瓦だったことはほぼ間違いなくなった。

⑧飛鳥池瓦窯の発見によって両者の関係は決定的になったがもう一点、飛鳥池遺跡を全国的に有名にした富本銭についても、これを和銅開珎以前と推測させたのは飛鳥池瓦窯とその廃棄物層から富本銭が出土した発掘所見による。

⑨すなわち飛鳥池瓦窯の操業は遅くとも道昭が東南禅

院で遷化の時を迎えた文武四年（七〇〇）以前と推定できる。これが日本最古の铸造貨幣と確信させたのだった。

と精緻なその創建瓦の研究と文献の考察がなされています。

しかし、網干先生は『古都・飛鳥の発掘』（平成十五年三月十五日）「飛鳥再考十三題・7 飛鳥池遺跡と富本銭」の項で（頁二三六―二三八）「前略」たしかに富本銭が出土した。これが貨幣として取扱ってよいのだろうかということである。従来、富本銭は藤原京や平城京、難波京跡で出土している。しかし、出土数はわずか数点であり、しかも出土地点が「溝跡」であることや長野県古墳から出土したといっても、出土状況が不明で、古墳築造の方が古く、のちに賽銭のように混入されたとも考えられること、流通貨幣とするにはあまりにも出土地が限られていることや、貨幣とは何かという原理、原則、この貨幣は誰に与えられ、持ち、誰から何を買うことができたのかという問題、そして今回出土したのは铸棹という铸造過程の遺物、あるいは不良品として放棄された可能性が高いという事実か

ら、これを最古の貨幣とすることに異論を唱える人がかなり多い。

年代を想定する方法にも疑問と異議を抱いている人もいる。天武紀はたしかに銅銭のことは書いているが、同記の銀銭は何か。銅銭を富本銭と考えるときの年代推定の根拠は何か。(中略) 仮に道昭が居住した東南院の瓦の焼成した層と同時期、あるいはそれ以前の層だとしても、それが道昭遷化(西暦七〇〇)以前のものであると決めることはできない。瓦の焼成の時期や期間にはかなりの時間幅があるうし、まして根拠となっている建物が道昭の東南院であるとする根拠も乏しいとする人もいる。

今回発掘された富本銭を、わが国最古の貨幣とすることも、通貨であるとするのも、また、「富本」という意味がはたして貨幣を指すのか。中国の文献をもう一度読み直してみることも必要である。さらに表面にある七つの点の文様を「七曜星」とみることがはたして正しいことかどうか。これも異論があることから、再検討してみることが大切であろうと考える。

飛鳥は日本歴史を考えていく上で非常に重要な地域

であることはいうまでもない。それゆえに国も県も村も一生懸命になつて飛鳥保存を検討しているのである。

飛鳥での出来事は他の地域よりも大きな国民的関心が持たれる。それだけに話題になる。それならばこそ、軽々しく考えるのではなく、判断は慎重な上になお慎重でなければならぬと思う。(傍線加筆)と記述されています。

私は、この重大な問題について先生の次回の講座を期待していましたが、それは適わぬことになりました。去来する思いを秘めて、茲に謹んで先生のご遺徳を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

〇七・二・一七

短歌

同窓会

石井光子

木々の葉は朱く黄色く装ひて同窓会も楽しく終る

他人ひとの名を頭の奥にしまひしや時過ぎてのちふつと出て来る

物すべてトゲトゲありと思ふ日に優しき言葉心に汲みる

左折するバス大きくて難渋すヨツコラシヨと無言で応援

梅の木につがひの目白飛び来たりあつといふ間に飛び去る正月

平石谷

大浦小枝子

拾ひたる団栗幾つ両の手に抱きて触れ合ふ音に聞き入る

背後にて何やら落ちし気配あり団栗一つ足許ころがる

谷底に平石川を覗きつつ三代三基の墓の主思ふ

今に伝ふる文献上は不明なりと平石谷の三代の豪族

発掘にあばかれたりし黄泉の国死者たち黙秘を守りつづくる

師の君は

岡田越子

師の君はあの世に行きておだやかに歴史の話されているやも

盆なればおはぎ作り煮物など仏に供へ心おだやか

正月の雨にそぼ濡れしつとりと乙女わびすけ一つのみ咲く

初春にがくあじさいとチューリップ活け込み春を先取りにする

首すくめ風よけ歩きふと見れば並木は紅く色づきており。

昼の月

木庭和子

ジムノペディー重くひびきて哀しみは癒さるるなく空をさまよふ

島唄の底に流るる哀愁に心把まれ五更を覚め居る

この道を行きし彼の日のときめきや佛求め森の陰ゆく

マヤ文化のふしぎを見つつグアテマラのコーヒー掩るる風寒の午後

空の青透かせて浮かぶ昼の月波立つおもひ沈めゆきたり

白き貝

玉置小代

たまらなく海が見たくて旅に出るツバ広の帽子目深くかぶり
春ちかき海へのバスに乗り合はせ土地の訛りのやさしき声聞く
早春の汀ていに拾ひろひし白き貝ひとつ掌てのなかで乾きゆきたり
蒼き海見下ろす丘に地藏菩薩みたり三人の子を抱き笑まひておはす
鳥羽の浜に打ち上げられし貝殻は引き波にまた攫さらはれてゆく

陽だまり

中野真知子

流されて流されてゆく人生にふと安らぎの一時のあり
夫おきて春日大社に詣ずれば闇の中から鹿が首出す
夕暮に枯れ葉踏み締め犬と行く知り合う人に挨拶楽し
寄せ合いて池に戯る水鳥に陽射し暖か別れの日近し
子を殺し親をあやめて何故に幸せなりや分からぬ此の世

黒きマリア

馬場 恭子

イスラムの文明残る宮殿は朝日をうけて今も輝く（アルハンブラ宮殿）

靴鳴らし怒りを激しくぶつきたりカルメンとホセのクライマックス

人体より断面の形決められしタイトルのベンチに坐りて憩ふ（グエル公園）

建築に生涯をかけしガウディの温もりのある曲線に見入る

ひびます
跪く人の後ろで手を合はすモンセラットの黒きマリアに

最果ての

福光 貞子

御手洗を手まね口まね行列で探し求めた延辺大学

交替で見張り頼みて用をたし晴々戻る円卓の席

四十の異国語みやげに持ち行きしイベリア半島褐色の大地

思いつきリアバンチュールを楽しみし旅は終りてホーテと帰路に

最果ての岬（口カ岬）に立ちて我が心マゼランさえも近くに想えぬ

冬日和

松村 せつ子

街中は人工の光溢れいる冬至の空に淡き夕月

おおみそか門扉にそつとサンダーソニア置きくれし人わからぬままに

※サンダーソニア＝南米原産ユリ科の花

冬枯れの庭彩りしうす紅のさざんか散らして氷雨降りゆく

「寒いね」と珈琲いれてる夫の声香りただよう如月の午後

紅白の和紙で椿の花つくる春はもうすぐ修二会はじまる

春の月

森田 陽子

大和なる法華寺の昼 古代雛の面おもふくよかに紅梅 燃ゆる

光明皇后こうめいこうごうの仁慈にじ伝うる葉湯の「からふる」ありて山菜蕨さんしめゆ 黄に満つ

郡山の城址に佇てば堀青く風に白梅 散りて流るる

激震の能登半島のニュース聞く うつせみの世を夫と肩寄せ

生かされてモネ観る幸を思う日の 春上弦の月は朧おぼろに

飛鳥川

安田和子

絶えだえに枯れ芦の島を流れ行く山谷に滾たぎれる飛鳥川はや
氷雨降れど水掛不動に願かける人の列あり灯ほ明りの町
炉の中の小さき世界で菊炭は炎の変化華麗に演じる
歌人にはなれじと肘つき眺めおり投入れられし桃のほころび
誰たが作り誰が装いし勾玉よ揺らせて聞かむ彼の笑い声

鼻が掴めて

牧野和代

春宵や開いて閉じて麻痺の指
東大寺鷓尾の見へゐて種下す
物干に袖はつてをり嬰粟月夜
ミサイル飛ぶ一大事あり梅雨の空
片麻痺の育む鉢や盆の月
浮草のどくと出てゆく落し水
松枯れの雨に赤しや竹の春
酒饅頭蒸す門前の時雨かな
麻痺の手で鼻が掴めて春立ちぬ
みほとけにそなへしさくらさきにけり

どんどこ舟

岩田禎彦

コーヒーの泡立ち頻りジャズうらら

良く言えばどんどこ舟のような男ひと

奈良盆地踏いでた神すすむ

秋うらら犬は一瞥くれしのみ

畑打ちて二合の酒に吞まれけり

遠花火

岩田久代

鉄筋の型枠はずす音も春

逢ふ度に母は小さく遠花火

千歳鉛母が代はりに受けとりぬ

少年は顔ひきしめて冬の朝

千両のほどよき赤や四つ目垣

酒蔵

上田善次

寄りかゝる欄干ぬき卯月かな

酒蔵の梁の黒きも黴の色

交番所あかり一つの夜寒かな

酒旨し烏賊を焙りて寒明けぬ

煮凝りと磨きぬかれた水屋かな

秋思の一步

岡良子

お涅槃の足裏にそつと触れし旅

鈴鏝びて鈴緒の重き梅雨の宮

堂縁に垂らす足刺す蚊の名残り

伎芸天秋思の一步出したもふ

田の上のガードレールも大根干す

田 植

お山焼き三脚据へて炎待つ

冬耕の鍬ふる男ひとに塔二つ

かくれんぼ炬燵にもぐる児の笑顔

夕立に吹奏楽の音消へて

病院の窓の下まで田植かな

秋篠川

鷺立つや秋篠めぐる水澄める

急行の止まらぬホーム稲雀

梅雨曇ホークナイフも不得手なる

浮板に和む冬鳥鴻池

酒を飲む人いなくなり寝正月

大 野 佐知子

駒鳥のひんからからと誕生日

饅頭屋の軒に顔出す燕の子

母に似て深きほほえみ秋裕

掛軸に銀新巻のどうどうと

やはらかき障子明りに茶碗蒸

誕生日

立 石 和 恵

周 藤 智 子

ワイパーに片寄せられて落花かな

青葉冷え乗りつぎ駅の小ざぶとん

夏草に埋もれて在す石地蔵

刺す針目粗くなりゆく暑さかな

よく似たる親子の猫や萩の道

萩の道

西 田 たまみ

無人駅

福井 佐知子

探梅行炭焼窯をのぞきもし
うぐひすに声かけらるる無人駅
亡き夫と並んでみたき日向ぼこ
千蒲団窓一ぱいのイナバウワー
いく度も海見へてくる夏の山

凍れる音

藤澤 慶子

材木の凍れる音をころがして
板の間に影をのせたる夕芒
異常なし叫んでみたひ冬空へ
ぼこぼこ穴は置き去りだいこ引く
餌をあさる鳥のかへす落椿

グ ル ー プ が ら の 便 り !

先史学講座

奥野 浩司

第二十四回文化祭の「先史学講座」の展示をご覧になられた方々は、多分、私達のブースでは土器片や土器編年表、出土地図、出土地域の交通関係図、土器のスケッチや写真、発掘現場の写真、土器製作の実修などを、予期されたのではないのでしょうか。なぜなら、先史学の「史」が文字による記録の意味での歴史を指しますから、文字資料が出現する以前の時代・日本の先史学は、主に縄文時代、弥生時代を対象とします。で（時代区分に用いられた名称が縄文式土器・弥生式土器から発しているように）、先史学がイメージするものは土器だからです。

ところが、私達が出陳したもので図象だけを取り上げますと、

①国旗（カンボジア王国）・市町村章（奈良県十四点、

大阪府一点）・カントリーサイン（文化財関連八点）。

②マンホール（文化財関連）・プロジェクトによる放映（資料多数）。

③奈良県北中部地区鉄道地図と駅案内板（JR「名所案内」・近鉄「ごあんない」）写真添付・奈良市文化財地図（文化財所在場所を種類別に色分けして示す）であります。

この一年間私達は、京都大学教授・泉拓良先生のご指導の下で、パブリック考古学（Public archaeology）を学びました。パブリックは「公衆の」・「公共の」の意で、「公衆考古学」・「公共考古学」となりますが、現実社会とのかかわりを重視することも意味しています。テキストを抜粋しますと『パブリック考古学は、過去数十年間で急速に考古学の一分野として認識されるようになった。これにはいくつかの要因がある。考古学理論の発展、政治と考古学との密接な関連性の認知、先住民を対象とした考古学における倫理的反省、

考古調査に公金を使うことへの説明責任意識の浸透、文化遺産を対象とした観光旅行の普及、考古学および文化遺産活用におけるマネージメント理論や手法の導入、などである。……遺跡や遺物を取り扱うにあたって先住民の信仰や地元の風習を尊重することは、文化遺産の効率的な管理や観光業の振興を妨げることにつながりかねない。ここで留意せねばならないのは、先住民も地元住人も、また、文化遺産管理者も旅行者も旅行者も、みな市民の一員である、ということである。このことから分かるように、市民のうちの誰が「考古学とは何か」また「考古学は何／誰のために行うのか」を決定すべきであるのか、……」。

従来、考古学は遺跡を発掘し、そこから得られる各種の情報をさまざまな方法で研究して、過去を復原する学問とされ、現実社会との直接的なかわりを持たなかった。ここに、視野の違うパブリック考古学との大きな相違があるように思います。今、身近な問題として「高松塚古墳と明日香村」を考えますと、高松塚古墳壁画の保存方法・石室解体問題は、学術上の（考古学を中心に）問題のみならず、文化庁の文化財行政

そのものが、社会問題となりました。村、村民、旅館、飲食、土産、運輸旅行者の社会経済活動にも影響を与えるでしょう。かように、考古学は現在の文化・社会・宗教・科学技術・経済・政治などに直接かかわりを持つことになります。

文化祭における私達の展示物・カントリースインとマンホールは、行政が文化財をどのように取扱っているかを、全国都道府県別に調査、比較し、駅案内板と文化財地図は、鉄道業者の取扱方を示すものです。パブリック考古学の学習の一端として、展示させていただきました。

読書を楽しむ

中西 義明

読書会を何回重ねてきたのでしょうか。おそらく文化協会が設立されて以来ではないでしょうか。それだけ読書会に参加されてきた方々も齢を重ねてこられたということです。私も入会、そして退会し、その間、十年以上の歳月を経て、再び、山内さんからの誘い

があり参加させていただきました。ここでも高齢化を
みることができません。しかし参加されている方々の外
見の老化は、正直なところ避けがたいとしても、感性
のみずみずしさは一向に変つていません。永年読書と
いう行為から活字に慣れ親しみ、それぞれの忙しい実
生活を通じて感性を育まれ、知を高められてこられた
からだろうと思います。

月一回の読書会の運営はマニュアルがあるわけがなく、
お茶と菓子、テキスト本の合評そして雑談。雑談とい
つてもテキスト本の内容から引き出されたお喋りで、
時にはきら星のような体験と知恵がそれぞれの個性に
染められ披露されるのです。

昨今、何事も自由競走という試練を経て発達し便利
になった文明に慣らされています。目に入ってくる活
字も広告文のような大きな活字か、コミック調の主語
と述語だけという短絡化された文や映像が主となつて
いるようです。技術の進歩に対応するには、即物的、
短絡的で、それもよしとするには、言い換えれば文明
に追随する文化に慣れていては、やがて大きな破滅を
招くことになるのではという思いがしなくてもありま

せん。

情緒と感性を経て認識へと至る過程を生活の場に呼
び戻す。文章の領域では適切な副詞や修飾語を含めた
総合的な活字世界を身近な生活に引き入れる。豊かさ
やぬくもり、読書会は批評するという行為を通じて回
復していく好個の機会です。文化を下の方から支え伝
承していこうとする地域に根ざした会でもあります。
そして社会のあり様を掴む端緒となり、参加者個々の
批評精神が養われる場でもあります。

宮部みゆきの短編集。藤沢周平の陽の目があたらな
い中堅武士（官僚）に焦点をあてた「武士の一分」が
入った短編集。北部図書館の前川館長さんが同人誌に
発表された作品集。スタインベックの「二十日鼠と人
間」。芥川賞受賞作、青山七恵の「ひとり日和」などを
取り上げてきました。「ひとり日和」の始めの方で主人
公が寄宿先へ行く描写で「この家は駅のホームの端に
あるくせに、わざわざ商店街のほうから回り道をして
こなくてはいけない」とこの作品を暗示する文があり
ます。そこに目的地があるのに回り道を強制される現
実。目的地というのは自由の表象ですが、回り道

をさせられることで自由から疎外されている、今の私達が置かれた現実でもあります。読書会も回り道させられているでしょう。その回り道の過程を、取り上げる作品群からしっかりと見ていければと思います。読書もお喋りも楽しいです。大勢参加下さい。

英語講座（初級・中級）

石井 光子

三年ばかり前、英語が少しでもわかればと、初級講座に入れて頂きました。中学一年生の教科書で教わっています。対話形式になっている所は、向い合って二人で対話します。暗記して言うのはむづかしいですが、英文を覚えてしまうと楽しいです。覚えたと思つて安心してると後日復習になり、すっかり忘れていた事に気付きます。このように行きつ戻りつしておりますが、この頃は発音が大変になりました。

初級クラスの終りには、中級の方々と一緒に英語の歌を三曲歌います。私は、はじめ口をもぐもぐさせておりましたが、そのうちに単語が分り、後れ馳せなが

ら、皆様についてゆきます。

また、昨年からは中級クラスにも挑戦させてもらっています。私には難しいのですが、皆様に優しくして頂き何とか出席しております。

中級では、古典落語の「英訳」を左面に、右面には日本語の落語が印刷されたテキストを使い、英語を再度和訳いたします。訳文があるから楽と思いますが、なかなかそうはゆきません。辞典で調べ自分の力で和訳するのは、私には至難の業ですが、題材が面白いので楽しく聞いております。落語のユーモアを再確認し、英語を習えることを感謝しております。

俳句とわたし

藤澤 慶子

ある会議に出席し隣席の婦人より平城院句会の事を聞きました。自分の才能やセンスのなさも考えず、牧野先生にご指導していただけますうれしい機会を得ることができました。良き先輩、よき友に恵まれ、先生を生涯の師と仰ぎご薫陶を賜り、気取らないお洒落

としてこよなく俳句を愛し楽しんでおります。

俳句作りの一番の基本は「自由闊達な心」と物の本で読んだことがあります。全力疾走してきた我が人生、少し立ち止まり移り行く自然をゆっくりりとまた、しっかりと「もの」を見届け写生していくことにより「自分らしさ」を出していきたいと思えます。そうすることにより、まだ知らなかった未知の自分に出会うことになるのではないかと考えております。

拾い集めた言葉をメモし、感情を吹き込み一句をと思っても自分の詠みあげたいものが出来ない時もあれば、朝起きて窓を開け何となく一句を口ずさんでいたりします。後の方は、推敲する時も自分ながら気に入ることが多くあります。自分の句帳に留るだけでなく自分の喜怒哀楽を十七文字の詩の形で伝えることのできる句会に参加させていただけることを、幸せに思っております。

中国語を学ぶ

蛭谷 眞明

私が、中国語を学ぼうと考えたきっかけは、二十年前前に遡り、一九八七年八月から台湾の同業会社に二年間単身で出向してからである。当時台湾との行き来は、香港の航空会社を、利用していたが、機内の案内が、英語、日本語、台湾語、中国語だった。後で分かったが、それは広東語だった。因に、私は当時、中国語是北京語、広東語、台湾語の三種類と理解していた。通訳を付けていたが、通訳が時々ミスをするので、自分でも中国語を学ぼうと考えた。

さて、週三回（午後七時～八時五〇分）の個人授業が開始された。もちろん北京語で、先生は日本語も英語も出来ないから、初期の授業は、先生が身振り手振りで、色々のしぐさをしたり、鉛筆で指したり、窓の開け閉めをしたり、同時に先生が発音をして、生徒が真似るといふ授業だった。

三週間程、続いてから、ピンインの一つ一つを、先生の口を見ながら、真似るといふ授業も始まった。その中

に、ピンインを組み合わせて、単語を学ぶ授業も始まった。この授業を、トータル四ヶ月に亘り、続けさせられた。今思えば、ピンインを四ヶ月も訓練したのに、未だに私の発音は、何と下手な事かと、反省しきりだ。

五ヶ月目からは、小学校一年生の教科書をベースにして、授業がなされた。これを六ヶ月続けたが、この間、先生が二人変わった。少しずつ程度の高いテキストも使用された。そして四人目の先生が来られた。この方は、一九四九年に北京から来た女性で、私と同年代で、非常に熱心に教えて頂いた。

こうして、一九八九年七月まで、台湾にて中国語を習った。小学四年前半を終えたことになった。もう半年学習したいと思ったが、結局日本に帰国となった。

台湾から帰国し、八年半過ぎて、中国語を、とうに忘れてしまった頃、再び白羽の矢が、立てられた。台湾の会社、中国の電力局、日本の会社が合弁企業を設立したので、一九九八年初頭に、浙江省杭州の地で、仕事をする事になった。それから、六年に亘って、中国に駐在するとは、夢にも思わなかった。

合弁会社は、通訳を付けてくれたが、彼は非常に日

本語が、上手でびつくりした。当方は台湾で中国語を、覚えたく自負していたが、全く実用に耐えず、シヨックを受けた。彼は非常に優秀で、二年後に通訳から、実務に転属する事になった。代わりに朝鮮族の女性通訳を雇ったが、三ヶ月で広東省に行ってしまった。更に女性通訳を雇ったが、日本語習得中で、私が彼女に日本語を教えるような有様で、九ヶ月で日系の化粧品メーカーに、ハントされてしまった。それ以降は、通訳無しで、切り抜ける事になった。

六年間中国に駐在したが、半分の三年間は通訳がいたが、後半の三年間は通訳無しだった。幸いにも最後の一年半は、高級顧問に就任したので、時間が余り、浙江大学で、中国語を学ぶ事にした。約九〇〇人ほどの漢語留学生があり、内訳は、韓国人四十%、日本人二十五%、その他は、オーストラリア、東南アジア、ロシア、中央アジア、香港、カナダ等多彩だ。年齢的には、大半は二十代から、三〇代程度で、小生のような年輩（当時六一才〜六三才）の学生は稀で、先生や同級生達は、私を大事にしてくれた。

留学生に登録されるには、簡単な文章及び会話テス

トを通ることだ。即刻、一から九級（中国では級は数字が大きいほど高い）までのランクに分けられるが、実質的には、八、九級は開講されない。私は、真中の五級クラスの一つに編入された。クラスの人数は二十名が基本だ。日本人は私だけで、半数以上は韓国人、その他各国人だ。別の五級クラスを覗くと、日本人が七人ほど居た。先生が気を遣って、クラスを替わっても良いとの事だったが、私は替わらなかつた。色々の国の人と接触出来るからだ。

午前八時～十一時四十分が、正規の授業だが、午後には自由選択で別の授業が受けられる。水墨画、中国の歴史、太極拳その他がある。定期的に屋外授業、史跡鑑賞なども行われた。半期毎に、宿泊旅行と、日帰り旅行が実施された。

授業が終れば、午後三時まで休養してから、予習復習にかかる。時間が非常にかかって大変だった。テレビを見るのも欠かせない。授業の一部で、昨日のテレビの話題が、題材になる事があるからだ。九時になると、睡眠に入って、午前三時頃に起き出して、予習に着手するのが、慣例となつた。

授業は前期、後期に分かれる。私は、二〇〇二年の後期に、五級のクラス、二〇〇三年の前期に六級、後期に七級で勉強した。六級の後半（五月初めから）に、サーズのため、一時帰国した。テキストを日本に持って帰り自習した作文をメールで、先生に送って、添削をして貰っていた。これも良い思い出だった。サーズの勢いが弱くなつたので、再び大学に戻つた。そして、二〇〇四年一月末に、駐在がちょうど六年になるので、やむを得ず帰国する事にした。何時の日か、七級でもう一度勉強したいとの気持は、忘れていない。

帰国後は、暫く休養をして、自宅学習をしていた。中国語は継続的な学習が必要だ。中国語同好会にて、皆さんと一緒に勉強すると共に、上海人の先生に、小人数クラスで、月四回口語を中心に習っている。

最後に、皆さんも留学して見ませんか。浙江大学では一ヶ月でも三ヶ月でも六ヶ月でも、留学生を受け入れてくれます。杭州の日系企業の駐在員の奥さんが、初級で三ヶ月ほど学習して、日本語学校の先生に収まっているケースもあります。それでは駄文で失礼致します。

パッチワーク研究会

服部 淑子

毎日同じ事のくり返し掃除洗濯と毎日うつうつと過
ごしていた私は小さな変化をとり入れることにしたの
です。それがパッチワーク教室に入会の動機なのです。
妙なもので針を持つと心が落ち着くように思います。

いらいらした時も手許に針と布を持って動かしてい
ると気が楽になり必死になっています。小さな変化に
なったのではないのでしょうか。

この会に入ってから間のない私で作品は少ないのですが
これからむづかしい物へと挑戦していこうと思ってい
ます。作品を作るには頭も使わないといけません。い
い物が出来るか楽しみになって心も楽しくなっていき
ます。

ばんやりしてはおれません。いらぬ事を考へがち
な私には有難いことだと思っています。明るい会話の
飛び交う中、楽しく続けて行きたいと思います。皆様
もどうぞおいで下さい。

銅板リレーフ同好会

森本 幸雄

私が銅板リレーフに出逢ったのは、四年前に中部公
民館で展示されていた時、見せていただき、素晴らし
さを感じ、早速平城西公民館に行き、見学させていた
だきました。

皆様方が、和氣諷諭と、楽しく作っておられるのを
見て即入会させていただきました。

早速ホームセンターで部品を購入して、先輩の皆様
方から、親切に指導して頂きながら、銅板に写しとり
をして、その後、銅板に、鉄筆とか、ヘラとか、先を
丸めた物で仕上げます。

出来上がった銅板を「ジフ」で磨いて洗ってから
「ムトウハップ」の液を入れた水又は温水で着色して、
その後透明ラッカを吹きつけて仕上げると言う順位で
おこないます。

指導していただきながら頑張っています。

一回一回の出来上がりが楽しみです。

現在、第一第三金曜日、午後一時から三時迄、月二

回平城公民館二階の部屋で楽しく作っております。
地区内の方、どうぞ見学においで下さい。

古文書を読む会

佐々木 純子

毎月第二第四の土曜日10時から12時まで奈良市菅平
ールの横にある「ふれあい会館」で開かれている「古
文書を読む会」は誕生して約二年半。現在の会員数は
二十名余です。出席率は毎回ほぼ100%近くで、皆さん
熱心であり学ぶ事への情熱はどの方も負けずおとらず
です。さてこの会は会場を開ける当番の方から始まり
ます。冬は暖房夏は冷房をどの方より少し早く来場し
て下さいます。会場の設営は会場に早く着いた順にし
てゆきます。そして10時少し前には毎回ほぼ全員が集
合しています。発足して二年以上経つのでそれぞれお
隣同士も心安くなりほんの数分ですが楽しい会話で座
が和んでゆきます。

会員の方々の熱心な事は元よりリーダーである石川
先生の情熱ある講義には毎回頭が下る思いです。今日

まで、先生の都合でお休みになる事はなく教えて頂く
者よりも先生の方が予習も熱心になさっているように
です。特に会員に頂く教材や資料は細やかに神経が行き
届き、全員のレベルを考えて下さり、資料の年代や文
書の種類（武家文書、地方文書、手紙文）をいろいろ
と折りまぜながら、作って頂いているようです。

先生のこの資料教材作りに感動している私ですが、
勉強の方は少し意に反して遅れがちです。しかしいつ
もほめ励ましを下り座を和ませ乍ら進められていく講
座は私事で休むのが残念で仕方ないくらの会です。

又石川先生の補佐役として来て頂いている花田先生
は時折落着いたアドバイスをなさいます。がそれを石
川先生は素直にお聞きになり、学ぶ人の姿勢はかくあ
るべきだと私達に示されているようです。会員諸兄姉
は先生方の情熱に引かれ、熱心に出席されています。

開始前にはいつも揃って授業を始める事が出来、遅
刻の方は今迄に記憶にないくらいです。会員のほとん
どの方は予習をされているようで、人生の先輩とお見
受ける方々程熱心でその能力やエネルギーはいつも感
心しています。しかしご自身の能力を自慢するご様子

もなく静かに勉強を続けておられる姿は人生の先輩として尊敬の念を抱く若輩の私です。特に初歩的な質問にもイヤな顔もなさらずに答えて下さる石川先生や諸先輩です。とても温くて居心地のよい会が出来上がっていきそうです。どの会員の方々も出すぎず下りすぎずいい位置関係を保っているようです。

I T革命が今日本を襲ってきています。それも一つの社会の変化で私達もある程度は着いて行かねばなりません。しかし今こそ世界に類を見ないこの国の文化を大いに大切にしたいと思います。特に文字を使った文化をずっと守り続けているのは日本は世界一だと思えます。私達の世代から次の世代へ必ずこの文字の文化を伝えていきたいものです。

古文書を読めれば歴史をもっと詳しく知る事が出来るでしょう。その為にも人生の先輩は言うまでもなく若い人々にも是非入会して頂き受け継いで行ってもらいたいものです。

末筆とはなりましたが石川先生花田先生の情熱と努力には感謝の意を表したいと思います。今後ともこの会の為に温かく少し厳しい講義をお願いします。又一

人でも多くの方がこの日本独特の文化を学ぶチャンスを持たれる事を心から祈っております。

フォークダンスの会

玉置 小代

フォークダンスの会は、二〇〇一年に宮川恵美子先生をお迎えして発足しました。

宮川先生には長い間ご無理をお願いして優しく熱心にご指導いただいてまいりました。止むをえない先生のご事情もあって、残念でなりません。本年一月、ささやかな感謝のパーティを開き活動を休止することになりました。

会員も次第に増え無邪気に手をつなぎ踊ったこと、秋の文化祭には年甲斐のない華やかな衣装で出演して胸を躍らせたことなどが忘れられません。

月二回の練習にかかさず集って生まれた友情は、いつまでも消えないことを信じています。

いつかまた、皆で再び踊れる日が来るよう心より願っています。

短歌を楽しむ会

岡田 越子

短歌を楽しむ会の発足当時より入っているのは、木庭・大浦さんと私が一番古いのですが、私のは時には川柳めいていて傑作です。それでも勇気を出して止めないのです。笑われ叱られても二十年以上続けています。それは楽しいからです。皆のいい歌を見たり下手な歌を直してもらって嬉しかったりするからです。

最近悲しい事がありました。短歌の先生になって頂いていた網千先生が亡くなられた事です。先生は折にふれ、ほのぼのとした歌を作られ私達を、なくさめて下さいました。

観月会の折頂いた歌です

青白く輝き澄みて照る月に静寂の夜平城の宴

又文化祭の折等、素敵な字で書いて下さって皆に下さったりして喜ばせて下さいました。

関大飛鳥文化研究所へ連れて行って頂いた帰りに好天気のかなかそぞろ歩きをした時、我が家の玄関に咲いている樹を「梅桃櫻」と言っていたのですが、それと

同じ花が咲いていて「源平桃」と言う名だとわかり嬉しかったのを思い出します。

何かにつけて思い出す先生の事これからも、先生のお教へを守って頑張つて行きたいと思つて居ります。

先生のいらつしやらない会ですが、皆様又一度お出掛け下さいませ。

押し花を楽しむ会

鈴木 佐知子

押し花との出会いは、十一年前サンタウンアカデミーで文化協会の展覧会があり見学に行き、どなたの作品かはわかりませんが、小さな真赤なバラが額に入つて展示されていました。今でも頭の中にはその色が鮮明に残っています。すぐ押し花を楽しむ会に入会し先生から材料一式を購入し帰り道春まつただ中、タンポポ、つくし、を採集して作品に仕上げうれしかったのを昨日のように覚えております。額の中で一番美しく見せる為には、正面向きか、横向きか試行錯誤しています。そう言う時には先生の出番です。この方が良い

のではとアドバイスをして頂きます。

私の頭の中ではバラの花が主人公、小花はそえ花と
思っていたがなんのなんの小花でも立派な作品。お花
を沢山買って来て押しで見るときたない色になったり、
おもってもみなかった物がきれいに出来上がって感激
したりしている。野山に出かけ花が咲いていると一輪、
一枝下さいねと心の中で手を合わせる。先生や生徒さ
んから花を頂いたり差し上げたり交換したりしていま
す。私の一番好きなお稽古事は押し花に夢中です。

先生、生徒の皆様にも、感謝感謝。

……歩く会

広田 省吾

……歩く会を平成六年から窓口として引き継いで十
一年、多くの箇所を歩きましたがその一つ一つが私に
は思い出として残っております。平成十八年度は左記
の様に歩きました。

四月八日(日) 晴 『上賀茂神社から下鴨神社まで
加茂川べりを歩く』

桜咲き、花びらが舞う加茂川べりを折しも桜祭りの
イベントが行われている中を幸せな気持ちで歩きまし
た。(参加者十七名)

五月二十八日(日) 曇後晴 『檀原南部(益田岩船)』

近鉄檀原神宮前駅→新沢千塚古墳群→宣化天皇陵→
小谷古墳→益田岩船→真弓鎌子塚古墳群→牽牛子塚古
墳→岩屋山古墳→近鉄飛鳥駅

(参加者八名) (三月三日の二回目)

六月二十五日(日) 『檀原南部』 雨 中止

七月お休み

八月二十七日(日) 晴 『吉野・奥千本から吉野水分
神社を尋ねる』水分神社の楼門をくぐると左手に拝殿、
右手に本殿そして正面奥に弊殿が建つという珍しい社
殿の配置ということで時期外れでしたが緑あふれる吉
野山を歩きました。帰途、金峯山寺(蔵王堂)を通り
過ぎたところで夕立にあい草餅の饅頭屋さんでちょっ
と一服。思い出になりました。(参加者八名)

九月二十四日(日) 晴 近鉄吉野口より御所までの予
定を車中で明日香の稲淵の彼岸花の群生を尋ねること
に変更。飛鳥駅下車、高松塚をへて、稲淵の棚田に群

生する彼岸花の景色の美しさに思わず歓声を上げました。石舞台を通り飛鳥駅から帰途につきました。

(参加者八名)

十月二十九日(日) 晴 『誰も知らない東大寺』

「秋の大和路見学会」と、「……歩く会」と合同で実施。

講師平松先生(奈良県立橿原考古学研究所・主任)

県庁の東を通る三六九号線を渡った東の、西大門跡から始まり西塔跡・食堂跡・東大寺の瓦を焼いた跡、東塔跡まで。平松先生の案内と丁寧な解説で、そここそ誰も知らない東大寺を歩いて皆様、得をしたような気持ちの一日でした。

(参加者三十四名)

十一月十二日(日) 晴 『近鉄吉野口駅より御所まで』

近鉄吉野口→阿吽寺→権現堂古墳→巨勢寺跡→安楽寺塔婆→新宮山古墳→日本武尊白鳥陵→掖上博多山上陵→鴨都波神社→近鉄御所駅

大豪族の氏寺と言われる巨勢寺、室町時代の建築と考えられ後世、三重の塔が一重に改装された安楽寺塔婆が山陰にひっそりとたたずんでいました。三重県亀山市、大阪府羽曳野市とともに「白鳥三陵」の一つで知られる御所市国見山西麓富田に「日本武尊白鳥陵」

がありました。葛城山の麓、高鴨神社とともに、京都の上・下賀茂神社の本家にあたるといわれる鴨都波神社を最後に「記・紀」の時代をしのんで歩きました。

(参加者四名)

十二月、平成十九年一月、二月、お休み。

三月一日(木) 晴 『奈良町周辺』

近鉄奈良駅(西口)→漢国神社→春日率川坂上陵→率川神社→伝香寺→菩薩院(十三鐘)→片岡梅林→頭塔→福智院→今西酒造→奈良町→近鉄奈良駅

今回は奈良町といってもちよつと周辺からはずれて歩きました。本通りからちよつと奥まっついて、つい見過ごしてしまう漢国(かんごう)神社、その境内に饅頭の祖として有名な林(りん)神社、ユリ祭りとして知られる率川神社、筒井順慶の菩提寺の伝香寺。奈良三椿の一つ散り椿のお寺として知られています。御住職のユニークな法話?(解説)を皆さん神妙に聞かれる。猿沢池から、三作石子詰めの哀れな伝説が残る菩提院をへて片岡梅林で食事。ちよつど梅が満開。浮御堂から日本のピラミッド頭塔へ。清水町の名のおとり名水が流れているといわれ、春鹿で知られる今西酒

造から奈良町へ。奈良町資料館を見学、音声館から帰途につきました。
(参加者十六名)

平成十八年度も無事歩くことができました。此れもお励ましいいただいた方や参加くださった方々のお陰と感謝しています。平成十九年度も皆様のご参加をお待ちしています。

料理を楽しむ会

堀田 幸子

数十年間に亘(わた)り家族の為に料理を作り続けてきた主婦達が、今度は自らの為に腕を奮い料理も人生も楽しんでいきます。指導して下さる松村先生には食材調達からレシピ作成まで全てに負んぶに抱っ子、包丁さばきより口さばきの達人揃いで先生はさぞお困りの事とは思いますがワーワーキヤーキヤーと騒ぎつつストレスをも解消しています。毎回四季折々の旬の食材を使って創意工夫をして下さるメニューは、家庭料理ばかりでなく時には一流料亭にも負けない程の懐石料理も教えて頂けるので本当に有難い限りです。

習ったレシピで自宅でおさらいをした時など普段食卓では並ばない上品な料理を前にして我が〇〇は目をみはり「あっ今日は料理の日だったんだ」と新しい味とまどいながらも喜んで食事を楽しんでいる様です。又メンバーの親睦会を兼ねての食事会、ハイキング等も楽しみの一つです。松村先生にはいつ迄もお元気で続けて頂けたらと願うばかりです。和洋中華数種類の副菜にデザート付き、総勢二十数名のとびっさりの笑顔を添えて、毎月第三木曜日、平城東公民館の私達のレストランでランチは如何でしょうか。

花風雅織同好会

八田 和子

此の同好会始まって早や一年半過ぎました。私は最初から同好会に入って居ました。

始めは小さな平織から始めだんだんと手間の掛る織になつて来ます。平織、裂織、千鳥織、綱代織、浮織、それに蘭草を織込んだり、麻を使ったりします、エトセトラ、

一生懸命になって織っていると、三時間はすぐに過ぎてしまいます。私は織上らない時は家に持ち帰り仕上げます。

小さな作品を数々を織り合せて自分好みの作品を作り上げている人もいらっしゃいます。

額、袋物、敷物、クッション、マフラー、タペストリー等々、自分の感性で好みの作品にします。

染めて有る糸で動物、花、等々、比較的簡単な作品も有ります。

私は始め裂織から始めました。(女の着物や、洋服の端布を使用)。布を〇・八cm〜一cmぐらいの中に裂きます。切端を一cmほど切り残して長い糸のようにする、筈にまき付けて緯糸にする。織機に縦糸を掛ける(作品の寸法に合せて) 此れで準備OK。

縦糸に、緯糸を通し箆で糸をしめる。縦糸を上下させながら緯糸を通し又箆で糸をおさえる(しめる)、作る大きくなる迄続ける、出来た時は「ほっ」とする、がまた織始めと終りの始末をする、機械から織上りはずす。完成。それを私は筆入れに作り、ファスナーを付けて、作品が出来た、その時の達成感はいれしい

ものです。楽しい時間を持つ事が出来ます。

皆様、一度見学に来られて織って見ませんか。

第三月曜日の昼からです。

表装の会

岡本 一枝

文化協会の中に「表装の会」があるのを知り、西島芳子先生にお願いをしてから、空席待ちで三年の月日が流れました。念願かなってご指導を頂くようになってから四年が経とうとしています。

現在会員は八名ですが、表装は大きな作業台が必要です。ので、限られた空間ではぎりぎりのところですが、又、学校とは違い全員が異なる作業をしていますので、先生のご負担にならぬように努めているものの、つい甘えてしまいます。掛軸のよさはなんといっても、くるくるっと巻いて収納出来ることにあります。簡単に掛け替えることで、季節の先取りをして楽しむことも魅力の一つです。最初は本紙の裏打ちから手とり足とり教えて頂き、何通りの工程を経て一幅が出来上が

った時の喜びは例えようもありません。そして工程の中での醍醐味は、一文字、中廻し、天地の三要素の取り合わせを吟味していくことです。従って作り手の個性や感性が出て、十人十色と様々で、仕上がったものは全部違った雰囲気のものになります。この一年で私の最も印象深かった物は、戦前の父の羽織裏を利用して作った色紙掛です。拙いものでしたが、思い出と共に兄弟四人で一幅づつ分け合いました。これも「表装の会」に入っていたなればのことです。

初めの頃は無我夢中で作っていた掛軸も、最近は何の手仕事の贅沢さを味合いながら、楽しく作品作りをしようと思うようになりました。そして何よりも今迄漠然と観ていた展覧会の作品も、軸装の場合は全体の調和と一緒に鑑賞することが出来るようになったことです。

それだけ視野や世界が広がって豊かになったことになりました。今だに満足のいく掛軸は皆無ですが、良き指導者に恵まれたご縁に感謝しつつ、もう少しお世話になろうと思っているところです。

詩吟の会

小山 マサ子

長い間お勤めさせていたゞいた第二の職場も無事に終わりました。その間、子供の結婚、孫の世話となんとか無事に過ぎ、今や高齢社会に身を置く年齢になりました。

先は、健康と惚(ぼ)けない精神力との両立を常に考えております。幸いに近くの集会所で太極拳をされておりましたので入会させていたゞいております。そこで詩吟の西尾先生とお知り合いになりました。

詩吟は格式のある習い事で、カラオケにも行かない田舎者がどうかなあと思いましたが、チョッピリのぞいてみようという好奇心が頭をめぐって、勇気を出して挑戦してみようと決心して入会を致しました。

先生の丁寧な指導のおかげで、少しずつ声が出る様になってきました。おなかの底から声を出さないと駄目なのです。これは正に健康とボケ防止に最適だと思えます。奈良の地は国のまほろばです。私は山も大好きで、竜王山から眺める二上山は殊の外好きです。

二上山にまつわる悲しい詩、又、四季折々の詩、親子を思う詩、を作者の気になって皆様と一緒に吟じます。

最後に、私が今まで一番心を動かされた和歌を挙げておきます。謀叛（むほん）の罪をさせられ死を賜り、二上山に葬られた大津皇子の辞世の歌と、皇子のお姉さんである大伯皇女の亡き弟を思う歌です。月二回、平城西公民館で おけいこしていただきますので、皆さんも御一緒に吟じてみませんか。

ももづたふ 磐余（いわれ）の池に鳴く鴨を

今日のみ見てや 雲隠りなむ

―大津皇子―

うつそみの 人なる吾や 明日よりは

二上山を 弟世（いろせ）と吾が見む

―大伯皇女―

ビーズ・アクセスサリーの会 西田 安代

いつも住吉先生が付けていらつしやるビーズアクセスサリーを見て「素敵だな」と思っておりましてところ、先生からお教えしましょうというお誘いがあり、毎月第一月曜日午後一時からの“ビーズ・アクセスサリーの会”の教室に参加させて頂くことになりました。

「作る」という楽しみと、自分で作った物を「身に付ける」という喜びの両方が味わえ、ビーズ作りの奥深さを毎回感じております。

とは言うものの、相手は小さなビーズ、大変細かい作業の繰り返しのため、目が疲れ、肩が凝ることもあります。また、その分出来上がった時の達成感もひとしおです。また、毎回ひとつづつ増えていく自分の作品をコレクションする喜びも、なかなか良いものです。そのコレクションを眺め「これはあの服に合いそうだな」とか「これは娘にあげると喜ぶかな」などと頭の中で想像するのも楽しみのひとつになりました。

毎回、私達ひとりひとりのために大変な準備をして

来て頂き、懇切丁寧に教えて下さる住吉先生にはいつも感謝の気持ちで一杯です。

これからも、生涯の趣味として、長く続けていきたいと思っております。

マジック同好会

井上 雄司

マジック同好会は、今年も昨年同様、文化祭に出演しました。日頃の活動もなく、文化祭だけに出演するのは心苦しいかぎりですが、マジックに少しでも関心を持たれ、自分もやって見たいと興味を示されることを期待して参加しました。

出演者も昨年と同じメンバー5人でした。それぞれ自分の好きなネタを、皆様の前で演じたわけです。一応成功裡の内に終わりました。

手前みそになります。マジックは、決して難しいものではなく、また手先の器用な人でなければ出来ないものではありません。要はマジックに興味を持つか否かにかかっています。来年は、出来るだけ多くの皆

様の参加を期待しています。

マジックの基本は、種を明かさないと、目の前で同じマジックを再現しないこと、ミスをしてあせらず、平気な顔でやることにつきます。

川柳一句

知ってるよ 云われて手品 やる気失せ

地酒の会

井上 雄司

地酒を味わう会と聞けば、人は酒好きの会とか、酒のみの会とか、やや揶揄した言葉で表現する人もありますがそれは大変な誤解といわねばなりません。地酒の会は単にお茶を飲む会でなく、酒を飲む会ではあるが、地酒は、地方の気候、風土に育まれて生まれた風味ある一品なのです。それを深く味わいながら、会員と談笑するのです。決して酒だけを飲む会ではないのです。酒は飲むもの、決して飲まれてはいけないのです。そのマナーを守りながら、楽しく一時を歓談しようとするものなのです。

文化協会にも、以前、地酒を味わう会がありました。しかし、残念ながら昨年3月末日をもつて退会されました。過去、伝統ある地酒の会に、二〇〇三年三月には、昨年亡くなられた網干先生も参加されたこともあり（層富NO二〇号、八〇頁の写真）往時の先生の元気な姿を拝見するにつけ、一抹の寂しさを禁じえませんが。

昨年、一部有志の方から、地酒の会を復活してはとの話があり、数名の参加をえて再開しました。原則、月一回、第三金曜日と定めて活動しています。場所は、原則右京ふれあい会館を使用しています。大方の参加を希望しています。

- ① 八月 定例会 東北の銘酒
- ② 九月 酒蔵見学と酒の試飲
- ③ 一〇月 定例会 大和の酒
- ④ 十一月 沖縄料理と泡盛焼酎
- ⑤ 一二月 定例会 北海道の銘酒
- ⑥ 一月 定例会（平成一九年度）

北海道樽酒祝寿

- ⑦ 二月 定例会 奈良の銘酒 永平寺
- ⑧ 三月 定例会 花見見物（氷室神社）
八咫がらす 白鶴

歌声サロン

小島 順

♪歌も楽しや 東京キッド♪ 右のポケットにや夢がある 左のポケットにや・・・美空ひばりさんの「東京キッド」、また♪恋は不思議ね♪の「恋」を「歌」に替えて、♪歌は不思議ね ああ頃のこと 懐かしさとともに巡る ときめく心 切ない胸 思いをはせて涙にくれ 歌なんて 悲しいものね 歌なんて なんになるのータラッタララン♪ 越路吹雪さんの「恋心」ですね、本当に「歌心」は何になるのでしょうか？

ここでせっかくの好機会なので歌声サロンの促進活動を述べさせていただきます。

古代ギリシャの自然哲学者アリストテレスやプラトーンも精神に与える音楽の効果を唱えています。アメリカ

カ・インディアンでは病人の投薬時には身内の者がその病床を囲んで歌を奏でる、そうすることが効果的であると言いつがれているそうです。

さらに、近代に於いては、アメリカでは、第二次世界大戦が終焉を告げ、帰還傷病兵の心の治療にも音楽活動が推進されはじめ、ベトナム戦争後もその効果の研究に力を注ぎ続けております。

また、いにしえのこの地奈良に於いては、古今和歌集の仮名序に、やまと歌の『言の葉』は天地の神々を感動させ、鬼の目にも涙を誘い、男女の仲を柔げ、猛る士の心をも慰めるもの、とあるそうです。

一千一百年の時間が流れる今も、人の心の発露として、和歌は魅力を保ち続けています、その「言の葉」を、湧き出るビートと共にリズムに乗せメロディが生まれ、ハーモニーでくるむ、こうして数々の歌が人の心と時代を映して生まれ続けています。

最近ではストレス社会と言われるようにストレスを感じながら生活される方が増加してきているそうです。ここで登場するお助けマンが「音楽」です。「音楽」にはストレス解消の作用があり、鑑賞の他に自分で演奏

することも効果があります、その一つが歌うことなのです。声を出すことは生理的快感に繋がります、しかし声が小さいと十分なフィードバックがなされていないのでこの状態では生理的快感を得ることができません。大きな声を出すことが必要です。それは心の中に溜まったものを出すという快感もあります、この快感はおしゃべりをする心理と似ています、

元来おしゃべりは心の中に溜まったことを外に出すので、ストレスがあまり溜まりません。楽しくおしゃべりすることはそれだけでもストレスを解消しているといえます。歌詞もまたストレス解消に一役買っています。歌詞の中には普段言えないこと、言葉で話すと恥ずかしくて言えない言葉も、歌なら言えてしまう、時にはそんなこともあります、これがまたストレスの発散となるのではないのでしょうか、さらに歌詞には人の心を感じさせる働きがあります、好きな曲を選ぶ時、メロディは勿論、歌詞にも愛着をもたれているが故にリクエストされることと思われ、ご自分の考えや感じることと同じ歌詞にめぐりあたりすると、感動したり実体験と重なって涙がでることがあります、その

涙には人の心の中を洗い流して、心の洗濯をしてくれる働きがあり、溜っていた不安、悩み、そしてストレスを解消し不思議なことに、爽快感が生じることがあります。以上私の体験から書かせていただきました。

このような訳で「歌声サロン」はいろいろな方々のご協力のおかげで、二年目に入ることができました。

歌唱することが、健康にとつての効力は継続することによって増幅され、皆様の健康維持への心薬となってお手伝いすることでしょう。

正に、私にとつては皆様と共に歌っているひとときはなよりの妙薬となっております。

古典を読む会

浅田 知里

月に一度、『源氏物語』をひもとくお手伝いをさせていただきます。一年程になる。

実はこの会は、文化協会発足当時、この町に住む者がそれぞれ何か講座を考えて開こうということと企画はしたものの、諸般の事情でそのままになっていた

のだ。今回二十数年来の約束がやっと果たせてほっとしている。

募集案内から日程の調整、会場の設定など、面倒なことはみな役員の方に引き受けていただいた。このようにお世話をして下さる方々が居られて始めて実現したことで、有り難く思っている。

みんなで読み始めた『源氏物語』、この日本が誇る世界的古典は、五十四帖という一大長編ゆえ、読み通すには忍耐力も努力もある。一人では一生かかっても難しい、ということ、一緒に読む仲間にお集りいただいたという次第。

一段落ずつ文法解説や語釈を交えつつ読み進めているのだが、息長く続けられるように堅苦しくならず気軽に、がモットーだ。読み進むうちに、平安の社会状況や生活のさま、当時の人々の思いなどについて、現代と引き比べてのおしゃべりが自然と起る。それぞれの場で年輪を重ねてこられた方々の集りだけに、それが殊のほかおもしろい。

各回の始めに、このところ、脳を活性化させるのに効果があるということで流行りの、音読も取り入れて

みた。声を揃えて読むのって何年振りかなどと言いつつその快さを楽しんでいる。

源氏にゆかりの地も訪ねたいよねなどと夢は広がる。長旅の一步目、「桐壺の巻」を読み始めたばかりで、行く手はまだ霞の中だが、十九年度は月二回にして、読み通すまでは死ねないね、と総勢十四名張り切っている。

毎回目を輝かせて聞いて下さり、楽しかったですよと誰かが声を掛けて下さる。源氏の研究者でもない私
が、烏澁がましくも話をさせていただく原動力になっている。

韓国語講座

鈴木 和子

안녕하세요?の挨拶で始まる韓国語講座も、昨年秋から半年たちました。この短い言葉でさえ、日本のアジアマ達にはなかなか自然に言えませんでした。ドラマや歌で耳慣れてはいても、本格的に学習するのは初めて、という方が多く最初の数カ月は、母音と子音の

発音と書き方、そして短い語句を、やさしい先生の「イイデスネ。上手デスネ。」に励まされ、記号にしか見えなかった文字が少しづつ読めるようになって来ました。最近、頻度の高い、短い会話を練習しています。

講師は「金星熙(キム ソンヒ)」先生。若くて、きれいで、英語と日本語は完璧に話されます。時々「ひらかな」と「カタカナ」が混じるのも微笑ましく、そんな時は、皆でお教えします。

ハングルは「大なる文字」という意味で、一五世紀中頃「世宗大王」によって作られた比較的新しい文字です。それにより漢字を知らなかった庶民も言葉を書く事が出来るようになりました。日本は三種類の文字で文章を作りますが、この文字では漢字語、外来語、数字でさえも全て、ハングルで表記します。又、日本とハングルの文は、語順が同じ。「てにをは」を挿むのも、文の最後に「か?」を付けて疑問文にするのも同じ、で、思考の回路が一緒。日本人には学び易い外国語だと言われています。

私とハングルの出合いは、ご多分にもれず二〇〇四

年の「冬のソナタ」でした。ペ・ヨンジュンさんには
まり「夏の香り」の茶畑の風景に圧倒されました。そ
れは日本の何処かと見まがうほど、よく似ていました。
そしてその時、花を浮かべる風雅なお茶や、いろいろ
の伝統茶がある事も知りました。それからお隣の国韓
国を、もっと知りたい。文字が読めたら、セリフが聞
き取れたらと、思うようになりました。

二月の終り、日光東照宮に行きました。その折、大
勢の中国や韓国のツーリストの方々を見かけ嬉しく思
いました。안녕하세요を繰り返して、見送りました。

生のハンゲルをお聞きになりたい方。韓国の映画や
ドラマのお好きな方。文化や料理に興味を、お持ちの
方。

毎月第一と第三金曜日。十一時～十二時半。右京小
学校で学習しています。現在十三名。笑いの絶えない
楽しいクラスです。それでは、기다리고 있습니다。

絵画の会

大台 雅生

(美術散歩)

◎教室一年のあらまし

昨年、平成十八年度は二十三回の例会(レッスン)
を持ちましたが、その内訳は室内静物写生十五回、ヌ
ード・クロッキー三回、人物デッサン一回、野外風景
写生三回、新年懇親会と別にバス・ツアーを実施いた
しました。会員の出席率は八十五%で比較的良いよう
に考えます。

懸案の会員獲得は年間3人の方々の見学、問合せが
ありましたが、正式に入会が決定したのはO・T氏だ
けでした。

新入会のT氏は前年の奈良市美術展覧会に洋画と日
本画の両部門に同時入選を果たし、今回は彫刻部門で
出品作品が市展二五年記念特別賞を受賞された異色の
能力を持つ実力者です。

同氏の今後の会の活動への参加と協力がおおいに期
待されます。

会の組織にあつては、絶えず新メンバーが加入し参加することは組織自体の再生・活性化につながり極めて大事でしょう。

私は大阪を活動拠点に置く“S美術協会”に所属いたしておりますが、7年前加入した当時は会員番号が400番台の後半でしたが、現在は200番台の丁度なかばで随分会員の移動が激しいことがわかります。

毎年、入会と退会の人数が2桁で推移して構成メンバーが大きく“新陳代謝”しているといえます。

反面、あまり移動が激しいと組織の不安定につながりその釣り合いが必要で、停滞とマンネリズムを排し、不断に新しい活力を取り入れる運営が望まれます。

◎入る計り出す為す

絵画の制作の場合、私たちがモチーフと呼んでいる対象が欠かせないわけで、それが風景であつたり、卓上の生花であつたり、時にはクロッキーのためのモデルになつたりいたします。

何処の教室でも習作のモチーフ選びには苦勞しており、その調達には会員より集める会費が唯一の原資で、

十分に収支を考えた計画が肝心です。

当会では月当番の会員がその月のモチーフを決められた予算の範囲で購入、準備することになっておりますが、毎回同じようなパターンとなりがちで苦慮いたします。

◎主題とモチーフ

何を描こうとしているのか、創作の狙い、目的が明確でないとき意図不明の曖昧な絵になります。

具象より抽象の場合に作者の独りよがりな、唯我独尊の作品がよく見受けられます。

また、大家といわれる画家の場合でも、全く同じ技法、パターンで常同的なモチーフを繰返しているのは些か食傷気味で余り頂けません。

先日、日展の大阪会場の展示を鑑賞いたしました。洋画部門でG大教授のS・I氏、W会会員のT・N氏はお2人とも婦人像を得意とする具象の名手といわれる画家ですが、I氏はお嬢さんを、N氏は夫人と連作のモデルとして登場しております。

I氏のお嬢さんは少女時代から始まり思春期に続き、

現在は結婚されて若妻のしつとりとした落ち着いた雰
囲気を父親の慈愛に満ちた眼（まなざし）で描かれて
おります。

N氏の場合は終始一貫して美しい伴侶としての夫人
をエロスの象徴として妖艶に表現されておられ、今回
は従来の豪華な着衣を脱ぎ捨て腰部に薄いベージュを
まとった裸像を発表されておりました。

両画伯とも十数年、同じテーマを追求されながら、
作品ごとに構成・角度、場面に変化をもたせ、観るも
のに新鮮な感動を与えております。

戦前、米国で最も著名な日本人画家として活躍した
「国吉康雄」は生涯女性を沢山描いておりますが、その
中で特にストリート・ガールと呼ばれた娼婦の肖像が
何枚か名作として残っております。

国吉が好んで描いた娼婦の表情は情事直後の物憂い
雰囲気を捉えた退廃的で耽美的女性の美を主張してお
ります。

◎南島の系譜（ゴーギャンと一村）

先年、奄美大島に滞在する機会があり、幻の画家と

いわれた「田中一村」の作品に出会うことが出来まし
た。

一村は生前全くいいほど無名のまま、その六九年
の生涯を奄美の名瀬のはずれの一軒の陋屋で誰にも看
取られることなく孤独のうちにその生を閉じたのは昭
和五十二年の三月のことでありました。

一村は千葉県の出身で奄美に来たのはすでに五十歳
になっており、画家としてではなく大島紬の泥染を行
う職人として働きながら絵を描くいわば漂泊の来島者
として住み着き以来十九年間を暮らした終焉地となり
ました。

東京美術学校で東山魁夷と同級であった一村は、若
くして将来を嘱望されながら、半年で退学しそれ以後
は画壇と縁を切り、職を転々として定職には就かない
まま青年、壮年期を送っております。

かねてより南の土地、自然に強い憧憬の思いを抱い
ていた一村は九州、四国、紀州等の写生旅行を機に急
遽、南西諸島への旅たちを思い立ち、鹿児島より貨物
船に乗り込み偶々降りたところが、奄美大島の名瀬港
であったといわれます。

奄美の亜熱帯の原色の風土に魅せられた一村は染色職人として働く傍ら、再び画家としての創作に取り組み、描き始めた何枚かの絵が、後年世に出ることになりました。

生涯独身で妻を娶らず、酒をたしなまず、食事は一日豆腐一丁があれば満足したという現代の仙人のような生活を貫いたということです。

一村の死後、残された（奄美の杜、アダンの木等）の一〇数点の作品が、一村の人柄を慕う周りの知人たちにより遺作展が開催され、それが評判となり、放送メディアを通じて（南国の鮮烈な自然を精緻に描いた作品群が“黒潮の系譜シリーズ”として）紹介され一躍脚光を浴びることになります。

以後各地で開かれた一村展はいずれも盛況を続け、現在、奄美に一村記念美術館が創設され同島を訪れた観光客が一村の最後を迎えた一軒家と共に人気の観光スポットになっております。

一方、フランス印象派の巨匠、ポール・ゴーギャンが南太平洋ポリネシアのタヒチ島に住み始めたのは一八九五年ゴーギャン四十七歳の時で、妻子を捨て失意

の二度目の来島となります。

タヒチでは十四歳の少女を愛人として同棲をしながら、後年に残る名作（タヒチの女をはじめとする一連の女人を中心とした群像）を残しておりますが、絵が売れず貧窮のうち五十五歳で世を去っております。

洋の東西に分かれて、二人の画家が時代を前後するとはいえ、南の島に強い憧れを抱き、そこに住み着いて現地の人物や風物を愛し続けて描いた一連の作品群が本人たちの死後、注目を浴び後世の高い評価を得ている共通の符合にいたく興味をそそがれます。

世俗の名利や平穏な生活から自ら離れ、“南冥”の孤島ともいべき異郷の土地で創作に取り組んだ二人の芸術家のすさまじい生き様に後世の私たちは何を学ぶでしょうか……。

「了」

笹作りの会

山内 梅乃

漢和辞典によると、「笹」は音読みで「キヨ」。訓読みで「ハコ」と読み、米などを入れる竹製の丸い籠のことをいうとあります。会が出来た頃、名称をなんとつけようと、皆で相談した結果、ありきたりの箱の名前より、夢があり、楽しい会にしようとの願いを込めて、訓読で読む「笹作りの会」と命名しました。

あれから十七年、日常使う生活必需品など、丈夫で長持ちをモットーに、簡単なものから藝術品(?)と呼べる物まで作れるようになりました。

材料は、ダンボール・上質のボール紙・木箱など、身近にあるものを使い、自分だけのオリジナルとして楽しんでいます。講師はいませんが、それぞれが工夫し、教え合いながら和気あいあいと続けています。

毎月第二月曜日、第四月曜日。

十時三十分～十六時三十分

右京ふれあい会館　ご参加お待ちしております。

『万葉集講座』

木庭 和子

「脱線　万葉集講座」と、松岡先生の標榜された『万葉集』講座も、回を重ねて二十年。

近鉄高の原駅の歌碑「秋さらば……」の、『万葉集』の長皇子のお歌から出発。高の原の山を下りながら、盆地を遊び、佐保川をたどり、そして奈良盆地でさまよい、万葉人に近づいてゆきました。

先生のテキストは、とてもユニークで、B4の用紙を縦四段に仕切り、読み、原文、解説、注と、綿密を極めた解説を前に、ユーモラスで、時にとぼけた味わいのあるおはなしを聞いていると、ツイ松岡ワールドにひきこまれてゆきます。

世に「万葉集講座」多しといえども、これほどプラス&アルファの多い内容を与えてくれる講座は少ないのでは……と思います。

万葉の故地に住み、万葉にどっぷり浸かって、日々

暮らす幸せを今更のように思い、深い感謝をささげずには居られません。先生、百歳までお元気で、不肖の弟子にご教示を賜らんこと、伏してお願ひ申し上げます……。

り、楽しみでもありの「踊りを楽しむ会」です。

一度覗いて見てください。

毎月第一金曜日 十三時三十分 右京ふれあい会館

踊りを楽しむ会

山内 梅乃

「手踊り」改め「踊りを楽しむ会」と改名しました。

もちろん椅子に座っての手踊りも、従来通りお稽古致しています。踊りであればフラダンス・フォークダンスなど……にも挑戦。(教えてくださる方があれば)。

リズムに乗って体を動かすことは、脳を刺激し、ストレッチ解消にも役立つといわれています。皆で楽しめる踊りを中心に、日本舞踊で使う扇子の使い方、足捌き、体の使い方など基本的なこともしながら、古典の日本舞踊も稽古しています。

来年の文化祭には、何を発表しようか、ワイワイがやがやのおしゃべりにも花が咲きます。苦しみでもあ

第24回文化祭記録



西崎卓哉先生「素晴らしい奈良公園の魅力」のご講演

展示の部

◎ 日時 二〇〇六年十一月一日～三日

十時より十六時半

◎ 会場 北部会館文化ホール

◆ 押し花 広崎 光子 伊藤 京子 宇野木久代

奥谷 敏子 景山 光代 岡田真千子

木村 絢子 杉山 安枝 鈴木 幸子

谷口早智子 西田 安代 西本万優美

野原 雅子 松村せつ子 御手洗敦子

山中優美子 吉田 敬子 若原 和子

◆ 銅板 皆藤るみ子 中村 一郎 山田 正

込山 博介 杉田 英二 谷口早智子

森本 幸雄

◆ 俳句 牧野 和代 周藤 智子 岩田 禎彦

立石 和恵 岩田 久代 藤澤 慶子

上田 善次 福井左知子 上田千代子

西田たまみ 岡 良子 故大野佐知子

◆ 表装の会 水野 繁三 岩坪 昇 岡本 一枝

富田三千子 吉田小夜子 金附みさ子

西島 芳子

◆ 絵画

上田 善次 大台 雅生 小西 淑彦

辻中 修 西村 通弘 山田ツル子

三木 昭夫

◆ ビーズアクセサリー

住吉 紀子 新司 輝江 岡村 則子

景山 光代 川崎 泰子 島川恵美子

杉山 安枝 玉置 小代 徳永美智子

西田 安代 平田 久栄 山本 尚子

◆ パッチワーク

打田 照子 櫛原千鶴子 井本 市子

新司 輝江 島川恵美子 住吉 紀子

菅 千尋 堀部 澄枝 服部 淑子

吉川 晋子 若原 和子 八田 和子

◆ 花風雅織

倉内 喜江 新司 輝江 八田 和子

服部 淑子 山内 梅乃 岡田 越子

◆ 宮作り

秋山 静 新司 輝江 山内 梅乃

周藤 智子 北村 源子

若原 和子

◆ 短歌 故 網干 善教 石井 光子 大浦小枝子

岡田 越子 木庭 和子 玉置 小代

福光 貞子 馬場 恭子 松村せつ子

森田 陽子 安田 和子

◆ 先史学 指導 泉 拓良

パブリック・アーケオロジイという新しい
学問を、日本の文化財にあてはめた研究。

遺跡とシンボル

文化財とマンホール

文化財と駅の案内版

◆ 古文書を読む会

山内一豊の妻・千代の消息(手紙)、豊臣秀
吉の遺言状、離縁状、瓦版など五点。(原文
書のコピー展示)

三日 表千家 片岡 圭子

四日 上田流 村上 照 馬場 恭子

五日 裏千家 岡田 越子

松村せつ子

周藤 智子

前田 初代

ソーラン節を聞く 田中哲吾

連・合吟 吉田 輝子・花田 清美・花田 克子

岩井 静江・杉田 英一・西脇 岑子

山本すま子・川崎 泰子・辰巳 幸子

小山マサ子・中務 明美

曲目 "Pearly Shells"

"September Song"

"Love Is A Many Splindored Thing"

橋本 友子

村上 寛子・新司 輝江・山内 梅乃

松村せつ子・田中真理子・石井 光子

木村有美子・小山マサ子・金山 祥子

高岡 文子・熊田てる子・鈴木 時子

堀田 幸子・中務 明美・高松三枝子

西尾 弘子・大浦 貞子・木村 麻子

中村恵美子・山本みどり・大石 智美

3) 舞踊 一四時四〇分

〔鹿音頭〕

〔とよた夢音頭〕

島川恵美子・松村せつ子

中西 敬子・山内 梅乃

村上 照・宮崎 滋子

湯川 博子・森岡きみえ

岡田 越子・若原 和子

手踊り同好会

6) 歌声コーラス 一五時五〇分

曲目

歌声サロン

4) マジック 一五時一〇分

井上 雄司

マジック同好会

岩井 静栄・岡田 越子

西脇 岑子・毛利 公子

5) 英語で歌いましょう 一五時三〇分初級・中級英語講座

1) 隣組

2) エーデル、ワイス

3) もみじ

4) 里の秋

5) 故郷の空

6) 川の流れのように

小島 順

上田 善次・大野 絹・榎原千鶴子
小泉 晃一・岸本 咲子・岡田 越子
川端和加子・大河原文子・玉置 小代
仲川 栄子・奥谷 敏子・河島 充子
松村せつ子・山根 直美・湯川 博子
森岡きみえ・喜多 正恵・河合智恵子
川崎 泰子・小山マサ子・辰巳 幸子
三木 澤枝・五十嵐鈴子

閉会 挨拶 一六時二〇分

2007年(平成19)年度
第25回平城ニュータウン文化協会総会

と き 2007年5月27日(日)

受付 午後1時より

開会 ヶ 1時30分

ところ 北部会館3F 多目的室1

◇平城ニュータウン文化協会総会次第 午後1:30~2:15

I 開会の辞

II 会長挨拶

III 来賓祝辞

IV 議長選出

V 議 事

- 1) 2006年度事業報告
- 2) 2006年度会計報告・監査報告
- 3) 2007年度事業計画
- 4) 2007年度予算
- 5) その他

VI 閉会の辞

◇第25回総会 記念講演 午後2:30~

『モンゴル城郭都市の考古学』

講師 千田 嘉博先生

(奈良大学文学部 文化財学科準教授)

2006年度事業報告

地域住民の方々と交流、親睦を通じ地域文化の発展に努めました。

ニュース・「層富」・協会報は順当に発行されました。各戸配布の協会報は例年通り自治会各位の協力により、各戸に配布されました。感謝申し上げます。

北部会館会議室と市民ホールを使用して、総会記念講演・文化祭・文化祭記念講演・セミナー・各公開講座も盛況でした。

北部会館との共催事業、運営など今後の課題となりました。

- 2006年4月1日 ニュース1号発行
27日 役員会
29日 右京地区歓送迎会参加
6月1日 ニュース2号発行
3日 常任理事会
3日 第24回(2006年度)総会
記念講演「飛鳥の古代寺院の瓦」
講師 平松 良雄先生
17日 公開講座「韓国語」
30日 「古典文学を読む」(源氏物語を読む会)
7月21日 タウンミーティング参加
15日 常任理事会
8月1日 ニュース3号発行
5日 常任理事会
9月10日 網干先生追悼文集編集委員会
28日 文化祭展示部 打ち合わせ会
10月1日 協会報発行 全戸配布
21日 文化祭上演の部 打ち合わせ会
29日 秋の大和路見学会「東大寺境内」
講師 平松 良雄先生
11月1日 ニュース4号発行
28日 奈良市都市経営戦略会議近隣コミュニティ形成部会参加
30日 協会誌「層富」第23号発行
11月3～5日 文化祭開催
展示の部 絵画、銅板レリーフ、短歌、俳句、園芸、地酒、花風雅織物、
宮作り、写真、表装、ビーズアクセサリー、押し花、
パッチワーク、古文書を読む会、先史学講座
3日 上演の部 詩吟、日本舞踊、箏曲、英語で歌いましょう、マジック、
歌声コーラス
4日 記念講演 「素晴らしい奈良公園の魅力」
講師 西崎 卓哉先生
歌の花束 松野直子コンサート
コーラス(エコー もくれん・コール コスモス)
12月10日 網干先生追悼文集編集委員会
会長選考委員会
文化祭反省会
27日 ニュース5号発行
2007年1月13日 新春を祝う会参加
2月12日 網干先生追悼文集・層富編集委員会
27日 ニュース6号発行
3月4日 網干先生追悼文集・層富編集委員会
25日 常任理事会開催

年度途中で会長逝去という訃報に接し、会の運営に不安を残す一年となりましたが、会長の意志を継ぐべく、計画された事業は皆で協力して活動することが出来ました。

2006年(平成18年)度決算報告

平成18年4月1日～平成19年3月31日

【収入の部】

(単位、円)

項 目	予 算	実 績	増 減	備 考
前年度繰越金	96,880	96,880	0	
会 費	450,000	426,000	△24,000	@1,500×284人
後 援 費	70,000	70,000	0	各自治連合会、自治会
寄 付 金	0	3,500	3,500	
雑 収 入	1,120	16,155	15,035	利息 余剰金
合 計	618,000	612,535	△5,465	

【支出の部】

項 目	予 算	実 績	増 減	備 考
事 業 費	150,000	186,880	36,880	文化祭、セミナー等
助 成 金	75,000	69,000	△6,000	23講座×3,000
会 議 費	10,000	5,900	△4,100	会議、資料、他
広 報 費	250,000	221,500	△28,500	会誌、会報、ニュース
事 務 費	10,000	9,645	△355	事務用品、他
印刷消耗費	80,000	0	△80,000	
通 信 費	6,000	1,600	△4,400	郵送料等
渉 外 費	10,000	4,000	△6,000	協賛費他
雑 費	5,000	0	△5,000	項目にない出費
予 備 費	2,000	0	△2,000	
積 立 金	20,000	20,000	0	
小 計	618,000	518,525	△99,475	
次期繰越金		94,010	94,010	
合 計	618,000	612,535	△5,465	

特別会計 南都銀行スーパー定期 ￥395,836

コピー機購入代金 ￥390,000

積立金残高 ￥25,836

備 品 コピー機一台

会計監査報告

2006年度の、会計帳簿、証票類他関係書類等を精査した結果適正であることを認めます。

2007年 4月 19日 監 事 東 勲 (印)

” 西 村 美佐子 (印)

2007年度事業計画

はじめに

当「協会」は、地域での日常的な文化活動を通して、地域コミュニティー・住民の親睦と和を実現していくために、当時の自治会・連合会の「街づくり」の方針のなかで結成推進されてきたものです。

この設立趣旨にそって、地域住民の多くの方の、参画を期するとともに、会員の研究創作発表、相互の交流などの場としつつ、地域文化の発展に、寄与することを基本としていきます。

また地域四自治連合会をはじめ、スポーツ協会、教育懇談会、地区社会福祉協議会などの各団体の活動とも提携して、ひきつづき「街づくり」に貢献していきます。

おもな計画

- 1 講演会の開催
総会記念講演
文化祭記念講演
- 2 セミナーの開催
- 3 会誌『層富』の発行
- 4 会報の発行（全戸配布）
文化協会案内号
文化祭 案内号
- 5 ニュースの発行（隔月発行予定）
- 6 大和路見学会
春1回
秋1回
- 7 文化祭の開催
- 8 観月の夕べの開催
- 9 年間を通じて趣味の講座開催
- 10 その他

19年度の活動方針に「拠点づくりのための渉外活動」を入れることとした。会の発展を期しての工夫など会員各位の、提案、役員会決定などにもとづき適宜事業を推進したい。

2007年（平成19年）度予算

【収入の部】

(単位、円)

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	94,010	
会 費	426,000	@1500×284人
後援費	70,000	各自治連合会、自治会より
寄付金	3,000	
雑収入	6,990	銀行利息他
合 計	600,000	

【支出の部】

項 目	金 額	備 考
事業費	140,000	文化祭、セミナー他
助成金	0	
会議費	5,000	会議、資料、他
広報費	350,000	会誌、会報、ニュース他
事務費	5,000	事務用品
印刷、消耗品費	80,000	印刷機器消耗品、コピー
通信費	3,000	郵送料
渉外費	5,000	協賛費等
雑費	1,000	各項目に該当しない必要経費
予備費	1,000	
積立金	10,000	
合 計	600,000	

昭和62年5月20日

100,000円

平成18年8月5日 網干基金設立

151,502円

講 座 ・ 同 好 会 一 覧

	定期講座・同好会	担 当 者	☎71局	曜 日 ・ 時 間	予定会場
1	万葉集講座	松岡 禮一	2964	第1水曜日(13時半～15時半)	北部会館3F会議室2
2	先史学講座	泉 拓良 問合せ 山内梅乃	1654	第3金曜日(15時～16時半)	右京ふれあい会館
3	古文書を読む会	石川 恒久 問合せ 西村美佐子	1671	第2・4土曜日(10時～12時)	右京ふれあい会館
4	読書会	問合せ 山内梅乃	1654	第4金曜日(10時～12時)	右京ふれあい会館
5	英語講座 初級 英語講座 中級	橋本 友子	0395	毎月曜日(9時半～10時半) 毎月曜日(10時半～11時半)	第1月のみ 右京小学校 右京ふれあい会館
6	中国語同好会初級 中国語同好会中級	松村 如洋	9605	毎水曜日(9時～10時半) 毎水曜日(10時半～12時)	北部会館 会議室
7	俳句入門 (平城山句会)	牧野 和代 問合せ 西田たまみ	1777 1922	第2木曜日(13時～16時)	
8	短歌を楽しむ会	問合せ 木庭和子	3494	第3火曜日(13時半～16時)	北 部 会 館
9	絵画の会	問合せ 大台雅生	72-0456	第1・3火曜日(10時～12時)	北部会館2F北老春の家
10	デジカメ(フィルム)講座	赤 坐 右 一 問合せ Eメール: hanapho@apostor.jp又は山内1654		第1・3水曜日(9時～12時)	北部会館3F会議室
11	… … 歩く会	広 田 省 吾	0207	奇数月 第1金曜日 偶数月 第4日曜日	野 外
12	園芸の会	北村 孫衛	0823	第4木曜日(13時～16時)	右京4-7-5
13	詩吟の会	西尾 弘子 問合せ 花田清美	2787	第1・3水曜日(13時～16時)	平城西公民館
14	踊りを楽しむ会	山内 梅乃 宮 崎 滋 子	1654 5093	第1金曜日(10時～12時)	右京ふれあい会館
15	押し花を楽しむ会	問合せ 若原和子	72-2508	第4水曜日(10時～16時)	右京ふれあい会館
16	表装の会	西島 芳子	72-0335	第2・4木曜日(13時～16時半)	北部会館3F多目的室2
17	料理を楽しむ会	松村 せつ子	9605	第3木曜日(10時～12時)	平城東公民館料理室
18	銅板レリーフ同好会	問合せ 皆藤るみ子	2960	第1・3金曜日(13時半～16時)	平城西公民館
19	パッチワーク研究会	打田 照子	2879	第2・4金曜日(13時～16時)	右京ふれあい会館
20	筥作りの会	問合せ 山内梅乃	1654	第2・4月曜日(10時～16時)	右京ふれあい会館
21	ピースアクセサリーの会	住吉 紀子	1699	第1月曜日(13時～17時)	右京ふれあい会館
22	マジック同好会	出口 幸男 世話人 井上雄司	5236	第2土曜日(13時半～15時半) 第4金曜日(9時半～12時)	平城東公民館
23	花風雅織同好会	倉内 喜江	1850	第3月曜日(13時～16時)	右京ふれあい会館
24	地酒を味わう会	問合せ 山内梅乃	1654	第2金曜日(10時～12時)	右京ふれあい会館
25	歌声サロン	小島 順	5651	第2金曜日(10時～12時)	北部会館3F多目的室1
26	古典を読む(源氏物語)	浅田 知里 問合せ 藤沢陽子	1956	第1・3土曜日(10時～11時半)	右京ふれあい会館
27	韓国語講座	金星熙(ソンヒ) 問合せ 鈴木越子	8390	第1・3金曜日(10時～12時半)	右京小学校
28	お茶を楽しむ会	問合せ 岡田越子	6155	第1火曜日(13時～)	概ね北部会館3F和室
29	折り紙を楽しむ会	山田 玲子	72-2552	第2火曜日(10時～12時)	右京ふれあい会館

会 則

第一章 総則

第一条 この協会は、平城ニュータウン文化協会という。

第二条 事務局は、平城西公民館に置く。

第二章 目的及び事業

第三条 会員の研究・創作発表、知識の交換並びに会員相互間及び他の文化団体との連携提携の場となり、相互文化に関する進歩普及をはかり、地域文化の発展に寄与することを目的とする。

第四条 前項の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1 講演会・研修会・展覧会・発表会・文化講座等の開催。
- 2 関連文化団体との連携及び協力。
- 3 研究の奨励及び研究業績の表彰。

第三章 会 員

4 会誌の発行。

5 その他目的を達成するために必要な事業。

第五条 平城ニュータウンに在住又は勤務する者

で、協会の目的に賛同する者とする。会員の種別は次のとおりとする。

1 正会員 年間会費一、五〇〇円

但し、高校生五〇〇円

2 賛助会員 この協会の趣旨に賛同する者で、年間会費五、〇〇〇円以上納める個人又は団体とする。

二、会員の更新手続きは不用とするが会費は総会後三ヶ月以内に納入のこと。

但し、二年間会費納入なき場合は退会と見做す。

第四章 役 員

第六条 協会にはつぎの役員を置く。

会長一名、副会長三名、常任理事若干名、事務局長一名、事務局次長一名、会計一

名、理事若干名、監事二名。

第七條 理事は、正会員中より選出する。

二 会長、副会長、常任理事は理事の互

選で定め総会の承認を得る。

三 事務局長、事務局次長、会計は理事

中より会長がこれを選任し、総会の

承認を得る。

四 監事は会員中より二名選出する。

第八條 会長は協会を代表する。

二 副会長は会長を補佐し、会長事故あ

る時は代行する。

三 理事は理事会を組織し、協会に関す

る事項を審議し執行する。

四 常任理事は理事会の決定に基づき業

務遂行に当たるとともに、総会で決

議した事項を執行する。

五 事務局長は会務の遂行に関する理事

会、常任理事会等の決議に基づき全

般の事務連絡処理に当たる。

六 事務局次長は事務局長を補佐する。

七 会計は会計事務を処理する。

八 監事は会計帳簿を監査し、通常総会

において報告する。

第九條 顧問・参与を置くことができる。顧問・

参与は理事会の同意を得て会長が委嘱す

る。

二 顧問・参与は会議に出席して意見を

述べることができる。

第十條 役員の任期は二年とし、再任は妨げない。

二 補欠より選出された役員の任期は、

前任者の残任期間とする。

三 役員はその任期満了後でも、後任者

が就任するまで、なおその職務を行

う。

第五章 会 議

第十一條 理事会は必要に応じ会長が招集する。但

し、理事の三分の一以上から会議の目的

を示して請求のあったときは、理事会を

招集しなければならない。

二 理事会の議長は、会長又は会長の指

名する者とする。

三 理事会は理事の二分の一以上出席しなれば議事を開き議決することができる。
できない。

四 理事会の議事は、出席理事の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決す。

第十二条 常任理事会は、会長、副会長、常任理事、事務局長、会計によって構成し、必要に応じ会長が招集する。以下理事会に準ずる。

第十三条 通常総会は毎年一回会長が招集する。

二 臨時総会は、理事会が必要と認めるとき会長が招集する。

三 総会の議長は総会出席者の中から指名する。

四 総会の議事は、出席者の過半数をもって決し可否同数のときは議長が決す。

第十四条 次の事項は通常総会に提出して、その承

認を受けなければならない。

- 1 事業報告及び収支決算
- 2 会計監査報告
- 3 事業計画及び収支予算
- 4 その他理事会において必要と認めたる事項。

第六章 会計

第十五条 経費は会費並びに補助金、その他の収入による。

第十六条 会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。

第七章 会則の変更

第十七条 この会則は、総会の議決を得なければ変更することができない。

第八章 補則

第十八条 この会則施行についての細則は、理事会の議決を得て別に定める。

第十九条 この会則は昭和五十八年二月二十七日から適用する。

2007年度
役員名簿

会長

副会長

上田善次

事務局長

山内梅乃

事務次長

山内梅乃

会計

片岡圭子

監事

西村美佐子

参与

東川口 勇 勲

常任理事

赤坐右一

石川恒久

井上雄司

打田照子

大浦小枝子

大迫くき枝

岡田越子

皆藤るみ子

梶野哲

北村孫衛

木庭和子

倉内喜江

小島順

鈴木幸子

住吉紀子

田中幸夫

玉置小代

南村照榮

西島芳子

橋本友子

花田清美

馬場恭子

廣田省吾

松岡禮一

松村如洋

松村せつ子

宮崎滋子

毛利公子

理事

若原和子

大井政子

笥ゆり子

河村美智子

喜多正恵

北川尚子

柴田晃良

山田綾子

編
集
後
記



本年は網干先生の一周忌にあたり、追悼文集
(層富第二十四号)を例年より早く出版できるこ
とになりました。

これもひとえに皆様方のご協力のおかげと深
く感謝申し上げます。
本日第二十四号をお届け致します。

編集委員一同

